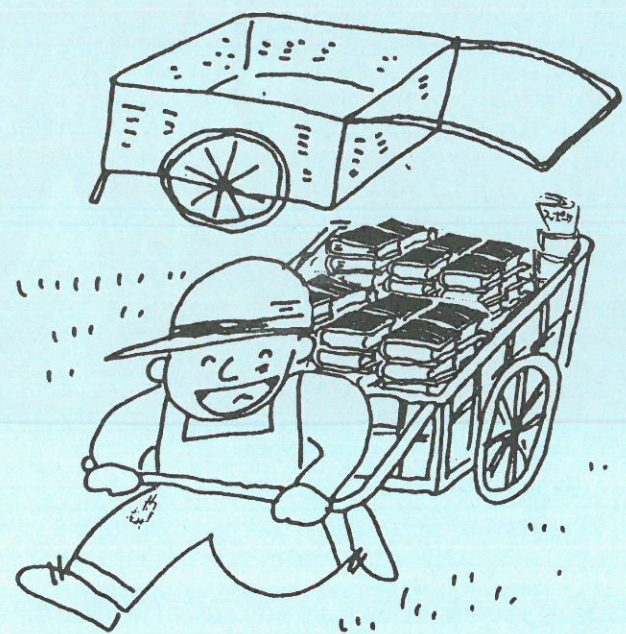


# 創立25周年記念誌

1982—2007



イエズス会社会司牧センター

旅路の里

創立25周年記念誌

1982—2007

イエズス会社会司牧センター  
旅路の里



笹田みすず・画

\* 表紙はセントヨゼフ女子学園40期生の作品。

\* 本誌内のイラストは漫画家ありむら潜さんの作品

# お祝いのごとば・感謝のごとば

## イエズス会社会司牧センター「旅路の里」

カトリック大阪大司教区 大司教 池長 潤

旅路の里は薄田神父様が六甲教会主任の時から、イエ

ズス会が新しい時代に、日本でも切り開く必要を痛感されて始められた事業であることは、今も私達の脳裏に深く刻まれています。その時のことを思い出しますが、司祭への召命が減る傾向がすでに現われ、イエズス会が持っている学校や教会のために人材がいくらでもほしい時に、何故、釜ヶ崎のために犠牲を払わなければならぬのか、という疑問の声も大きく挙がっていました。薄田神父様を手離したくない六甲教会の信徒さんたちも、大多数の方々は、神父様を釜ヶ崎に送り出すことに反対でしたし、イエズス会の人たちも新しい釜ヶ崎の使徒職に批判的でした。しかし、薄田神父様の決意は固く、とうとうイエズス会の管区から釜ヶ崎に「旅路の里」を開設

する決定がなされたのです。

私は、最初からどれほど薄田神父様がさまざまな面でご苦勞なさっておられたかを思い出します。この事業を維持してゆくために、ご自分の講演会の収益を主な財源としておられました。何よりもご苦勞なさったのは、釜ヶ崎の人たちのために有意義な働きをどうすればよいのかという、もっとも大事な目的をしっかりとつかむことにあつたと記憶しています。フランシスコ会の本田神父様のように、現地の人たちから喜ばれ、迎え入れられることは容易なことではないと改めて思いました。うっかりすると、こちらの自己満足に終始し、本当のところは、その土地の方々と一体となって、共に生きる事からほど遠いものになってしまうのです。

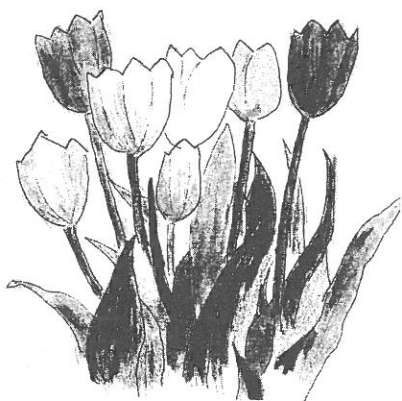
皆同じ日本で生まれ、日本の中にいながら、日本の社

会からは虐げられて放り出されている人々の状態は、カトリック的な人間観からは考えられないことです。しかし、実態は決して肯定できるものではありません。阪神淡路大震災の時も、いわゆる路上生活の人々は、亡くなられても、死者の数には入れられないで、見捨てられています。特にひどい寒波に見舞われた年、正月周辺の幾日かは、毎年、夜間にも労働センターのシャッターは開けられたままにされるので、その日数を例年よりも大巾に増やすよう、ボランティア団体が交渉したにもかかわらず、大阪府はなかなかこの要請を受け入れませんでした。マスコミが路上で凍死した人々を取り上げてからはじめて府は日数の中を広げたのでした。このような事例は、日本の社会認識も、まだまだ同じ人間同士に対して目を開かれていない事実を立証するものです。

薄田神父様がみずから始めた「旅路の里」の事業にかかわっておられる間に、2回訪れたことがありました。2回とも、宿泊もお願いしました。昼は、釜ヶ崎の中を見せて頂き、プロテスタントの牧師様や、いろいろな活動を紹介して頂き、夜になると、薄田神父様から釜ヶ崎

についてさまざまなことを話して頂きました。

旅路の里が現在開設から25周年ということですが、この家は今までに大きな役割を果たしてきたと思います。東京の山谷と並んで、カトリック教会にとって決して無視をしてよい場所ではありません。多くの信徒の方やカトリック校の生徒がここを訪れ、この場所を見て、多くを学んできました。これからも、ここの担う使命を大切にしていきたいと思っています。



## 旅路の里25周年

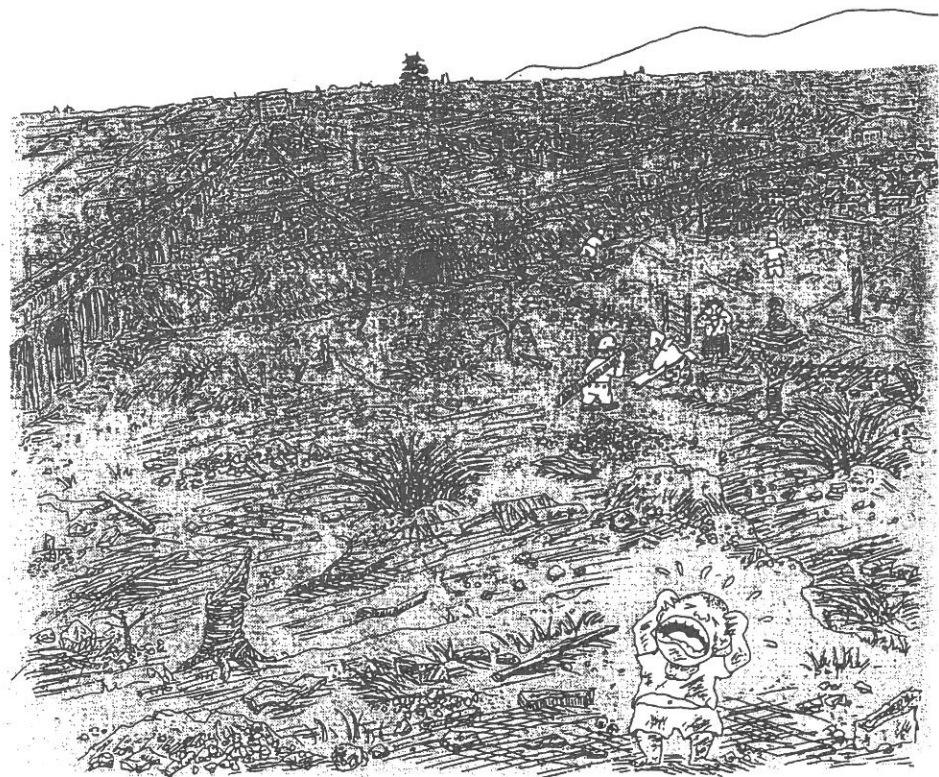
カトリック大阪大司教区 補佐司教 松浦 悟郎

「おい、その若いの、泊まる所がなかったらわしの所に来たらええ！」これは、私が旅路の里の“夜回り”で毛布を持って歩いていたときに、逆に一人のおっちゃんに声をかけられた体験です。きつと、毛布を持ってとぼとぼ歩いている私の姿を見て泊まる所がないと思われたのでしょうか。でも何となくうれしく感じたのを覚えています。私を仲間のように思い、親しく声をかけてくれたからです。誰かのために出かけていって何かをするというのとは比較的簡単にできても、自分の家に迎え入れるということはそんなにたやすいことではないと思います。この体験も当時阿倍野教会にいた時に尋ねてくる人との関係を見直したきっかけになりました。

1986年、阿倍野教会に赴任したのをきっかけに旅路の里の木曜夜回りに参加したのが私の釜ヶ崎への関わりが始まりでした。以来、海外研修に出かける1993年まで続けた“夜回り”は私にとって本当に大きな体験でし

た。毎週木曜日、旅路の里に行く度に何かを感じ、何かに気がつかされて帰ってきたものでした。私にとって釜ヶ崎との出会いは、今の生き方を形作っている土台にもなっていることは確かなことです。

旅路の里は主に研修施設としてこれまで多くの人々を釜ヶ崎に招き、また、釜ヶ崎内のさまざまな運動の拠点としてその場を提供してきました。釜ヶ崎で直接行動を継続できなくてもここを訪れ触れていった人たちは、きっと人間を本当に尊重する社会の実現のためにいたるところで行動していることでしょう。25周年を迎えた旅路の里のこれまでの働きに感謝すると共に、その果たしてきた役割をこれからもぜひ継続してほしいと願っています。



1945年 大空襲後

## 旅路の里創立25周年記念によせて

イエズス会日本管区 管区長 住田 省悟

今から20年ほど前になるでしょうか。最初の赴任地、イグナチオ教会の高校生を連れて、年末に釜ヶ崎の体験学習に参加したことがあります。場所のことを考慮して、事前に高校生や保護者によく説明したつもりでしたが、すぐに賛同を得ることは困難でした。結果的に10人程度の参加者が得られたものの、高校生たちの消極的な姿勢からいって、体験学習に多くを期待できませんでした。

旅路の里の宿泊が始まって一日、二日過ぎた頃、彼らの姿勢が変わりました。路上で生活する『おっちゃん』たちの顔を見ながら話せるようになり、越冬パトロールにも積極的に関わるようになりました。この変化は教会に帰っても続きました。

イグナチオ教会のミサには多くの信徒が参加しますが、ミサの中である高校生が釜ヶ崎の『おっちゃん』たちのために共同祈願をささげたのでした。これには驚きました。何が彼らを変えたのか、自らの経験に照らし合わせてある程度理解することができましたが、すべてが分か

ったのは高校生会での彼らの分かち合いの後でした。

この経験は、釜ヶ崎におけるイエズス会の使徒職について、積極的に評価するだけでなく、深く考えてみる機会となりました。もちろん、人が変えられていくために釜ヶ崎があるわけではありませんが、高校生に『回心』と呼べるほどの大きな出来事を与えたのは、現に釜ヶ崎であり、釜ヶ崎の『おっちゃん』たちであったのを否定することはできませんでした。

釜ヶ崎は社会の歪みが凝縮しているところであると言われます。実は、高校生たちにその現実に触れて欲しかったのですが、彼らにとっては、『おっちゃん』たちにして上げられることは何もないけれども、『おっちゃん』たちが怖い人たちではなく、心を通わせることができると、心を通わせることができる人なのだ、ということがもともと大きな経験だったようです。

このことは、旅路の里というイエズス会の使徒職の、決して無視できない原点なのではないかと思えます。歪

みが凝縮しているところにまず行って見て、外からではなく、そこからものを見てみる。そして、そこにいる人を限りなく自らに近い人として体験する。何もできないけれども、その経験は人に伝わっていく。歪みが自らの中で正されていくあり方を通して。

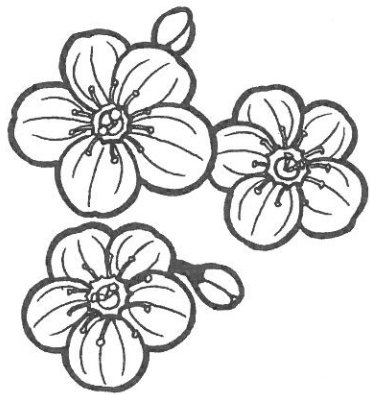
現在、社会の歪みは、全国のいたるところに見られる状況です。どのような形での貢献が期待されるのか、会としても模索しているところです。けれども、旅路の里の使徒職が関わり続けているこの原点を忘れてはならないでしょう。

歪みが凝縮している現実の中に、自らの偏見や歪みが正されていくような人との出会いがあること、そして、その出会いを通してしか、人々にその現実を伝えられないこと。この事を大事にしてきた旅路の里の使徒職は重要ですし、評価される場所ではないかと思えます。

今後、どのような活動に発展していくのか未知数ですが、薄田神父様の摂理的な出来事を通して始まった旅路の里の使徒職が、いつもこの原点に立つことを忘れないように努めて参りたいと思います。

旅路の里の使徒職にご理解をいただき、旅路の里を支

援し続けてくださっているすべての方々に、心から感謝を申し上げます。



## 旅路の里創立25周年に向けて（社会使徒職の精神・方針）

イエズス会社会使徒職委員会 委員長 下川 雅嗣

旅路の里創立25周年おめでとうございます。

この機会にイエズス会の「社会使徒職」の精神・方針を語るように頼まれましたが、実は私にとって「社会使徒職」について語ることはどうもピンときません。旅路の里での使徒職はこれまですばらしい価値のあるものだと思いますし、また私自身は東京で野宿者と関りながら活動していますが、これらが「社会使徒職」として他の使徒職と差別化される特別なものとは思えないからです。そこでここでは、私にとっての使徒職（言い換えるならば「生き様」）のイメージを分かち合わせていただければと思います。第一に、私たちの霊性においては、「すべてにおいて神を見出す」ことがその中心にあり、私たちはそれによってのみ満たされます。すなわち、私の人生は、どこでイエスと出会えるのかを常に探し求め、イエスとより一層活き活きと出会える場を探し続ける道を歩み続けているのだと思います。そうしてより活き活きとイエスと出会える場を探そうとしていくと、イエス

いたその目的、その最大の望みは「神の国の建設」です。ここで「神の国の建設」とは私の言葉で言うならば、「（神の）愛によって動かされる社会の実現」です。これは、「市場における競争で動かされる社会」でも「権威者の力による支配によって動かされる社会」でもありません。そしてキリスト者はその愛によって動かされる社会の実現を担っていくように召されています。すなわち、単に「かわいそうな人を場当たりの援助する」のではなく、愛によって動かされるような社会に、この現実の社会構造そのものを変革していく働きが求められています。私にとって使徒職とは、このようなイメージであり、これはキリスト者のミッションすべてに言えることのように思うのです。

このような私の使徒職のイメージから旅路の里を振り返ってみたいと思います。これまでの25年間、特にその前半に日本は著しい経済発展・バブルを実現し、多くの日本人の生活は次第に豊かになっていくという時期でした。しかしながら、実はその期間の経済発展が、裏に多くの貧しい人々、小さくされた人々を踏み台にしていることはあまり意識されていませんでしたし、意図的に隠

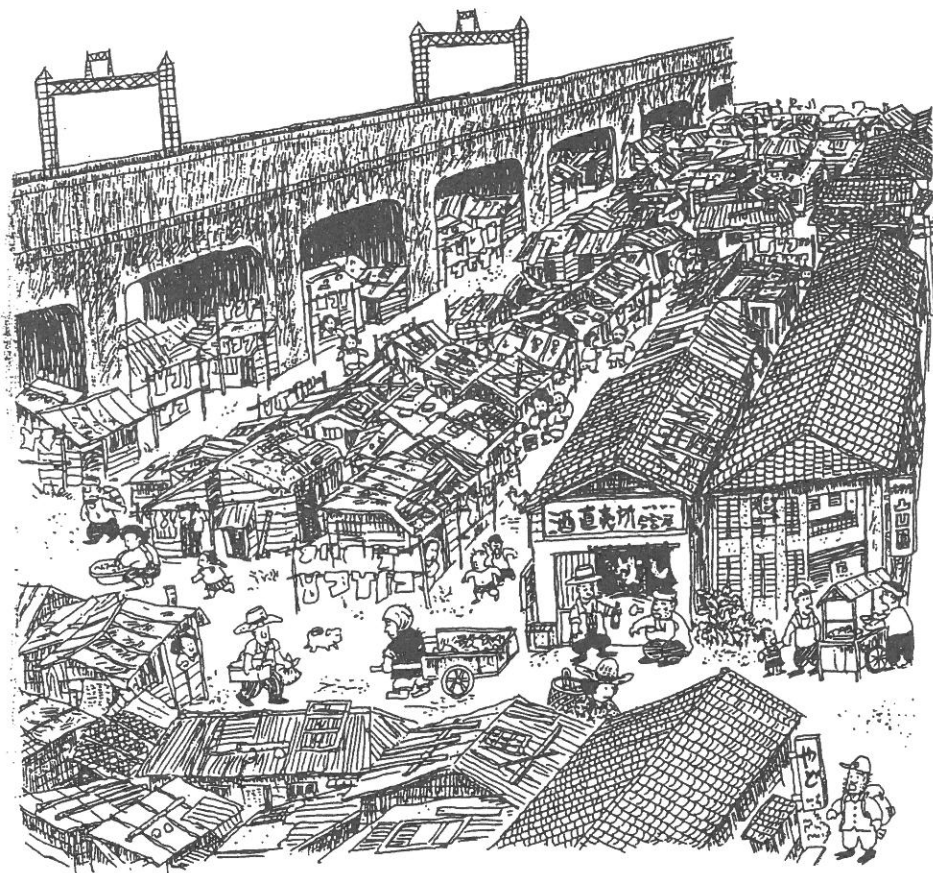
が御父の御旨に従った結果そうであったように、必然的に貧しい人々、抑圧されている人々、社会から排除されている人々、居場所を奪われ人々へと何らかの形で向かわざるを得ないのだと思います。なお、これらの小さくされた人々とともに歩むことによって出会うイエスは必ずしも十字架上で苦しんでいるイエスとは限らず、この社会を覆う闇の力に打ち勝つ『光』である復活されたイエスに出会うことの方が多いのかもしれませんが。第二に、私たちすべてのキリスト者は、「イエスについていく」とに召された人々たちです。そのイエス自身は、枕する所もなく（マタイ8・20）、常に貧しい人々、社会から排除されている人々の間を廻り歩き、彼らと運命をともにし、「そのような小さくされた人々こそ愛されている」と神の愛を生き様で示していました。そんなイエスについていくというのですから、何らかの形で、イエスが接した人々に近づき、イエスの生き様に少しでも近づいて行くようにと促されます。第3に、イエスが寝食を忘れて働

されていたとも言えるでしょう。踏み台にされてきた人々の多くはアジアの貧困者たちでしょうが、日本国内においては釜ヶ崎や山谷などの寄せ場集まる日雇い労働者たちがまず挙げられるでしょう。この釜ヶ崎や山谷などの寄せ場の存在も日本社会では見えにくくされていましたが、見ようと思えば唯一目に見え易い形で顕れていたとも言えます。すなわち、この釜ヶ崎は日本社会の歪みをもっともよく現す特別な存在の一つであったと言えます。そしてその視点から見ることによって、日本社会が全く異なって見えてきたのです。残念なことに必ずしもイエズス会がその視点を明確に持っていたとは言えないでしょうが、少なくとも心ある人にそのような視点を持つ場所を旅路の里は提供し続けていたのだと思います。なお、バブル崩壊後現在に至るまでの期間においては、釜ヶ崎は日雇い労働者の町というよりは、高齢化が進み福祉の町のような様相を呈しています。しかし、ここでも過去の産業発展のために使い捨てられた人々が社会の歪みを露に示しています。

このように振り返ると、これまで経済発展という幻想の中で見えにくくされていた社会の歪み、闇の部分

るみにだし、その歪みを正していく行動に促すきっかけを、旅路の里は提供し続けていたとも言えるでしょう。そしてこれまでの「社会使徒職」の中心軸は、見えにくい闇を明らかにし、正義を実現していくことであつたのかもしれませんが。旅路の里のこの役割は今後も続くでしょうが、これからの考へるときにはそれだけでは足りないように思います。というのは、昔は釜ヶ崎や山谷などの寄せ場でしか目に触れることがなかつた野宿者は全国のほとんどの都市にいます。そして、日雇い派遣、契約社員など様々な形態の不安定かつ低賃金な就労形態に置かれている人々（ワーキング・プアー）はすでに全労働人口の約3割を超えています。これは昔、特別な場所であつた釜ヶ崎が日本全国に広がっているとも言えるのではないのでしょうか。隠されていた闇が日本社会全体を覆いつつあるとも言えるかもしれません。しかも、これまではある特定の地域に集中していたので、社会から排除され、居場所を奪われ、小さくされた人々が共に存在することができたのに対し、その場所さえも奪われ、分断されてゆき、より闇が深まっていくとも言えるでしょう。このような時代において、「社会使徒職」は闇を露にする以上に、闇とともにあるはずの「光」を探し、その「光」に導かれながら正義を実

現していく必要があるように思います。イエスの過ぎ越しの神秘を信じると、闇が深ければ深いほど「光」はあるはずで、ということとは、もともと闇の深かつた釜ヶ崎には「光」も強く存在しているのではないのでしょうか。旅路の里が、そのような「光」を探し、体験する場の拠点として、これからの新しい役割を見出していくことを祈っています。



1950年代 バラック小屋がひしめく釜ヶ崎



## 旅路の里と協友会そして…

釜ヶ崎キリスト教協友会 共同代表 吉岡 基

旅路の里が25周年を迎えるにあたって「釜ヶ崎キリスト教協友会として何か書いてもらえないか」と高山神父に頼まりました。正直言って困ってしまいました。私は協友会の共同代表の一人なのですが、協友会としてというより、それ以上に個人として薄田神父をはじめ多くの人たちとの出会い、そして生活（居候でしたが）もした「旅路の里」の方が、自分にとっては強烈だからです。

というわけで、本題から少々ずれてしまいかもしれませんが、個人的な旅路の里への「想い」も込めて25周年を振り返ってみたいと思います。

### 旅路の里との出会いと「夜まわり」

旅路の里が労働者の共同生活の場として活動をはじめたのと同じ時期に、私も釜ヶ崎にやってきました。当時は新しくできた旅路の里には寄り付きにくく、協友会の事務局や活動の拠点だった「喜望の家」や、金井牧師の「いこい食堂」「いこいの家」に出入りしていました。金

した。それもこれも、旅路の里の活動方針うんぬんというより、薄田神父の人柄と優しさがそうさせたのだと思います。

1980年代は、釜ヶ崎の労働者にとっても状況が大きく変化した時期でもあり、特に野宿を余儀無くされる労働者が激増したことで、行政の施策が全くと言っていいほど機能していなかったことなど、夜まわりをするだけでは何の解決にならない状態でした。旅路の里を拠点にできたおかげで、夜まわりの参加者も増え、活動も生活相談や医療相談が受けられるほど広がり、釜ヶ崎医療連絡会議と合流して本格的に釜ヶ崎の医療や福祉の問題に関わるようになっていきました。

### 「ジカタビジ（地下足袋十旅路）の里」

旅路の里には多くの人が入りました。まずは労働者。旅路の里の最初の活動で共同生活をしていたOさんは、酒が入るとやって来ては神父と神学問答？をはじめます。「神父、下着くれ」神父は「あんたに渡す下着なんか無い」（彼との長い付き合いで、今渡すと売ってしまい酒代に変わってしまうと判断した）するとOさんは「聖

井牧師の「アオカン（野宿）のしんどさは冬だけやない」という言葉を受けて、私と同じ年頃の10代や20代の若者数人が「いこいの家」に寄り集まって「何かせなあかんやろ」と通年の夜まわりをはじめました。しかし、やればやるほど労働者のしんどい状況と自分達の無力さを思い知らされて悩み、おちこみ、酒をのみ、活動の進展もないまま、悶々とした日々を送っていました。

それからしばらくして、旅路の里の薄田神父と話す機会がありました。旅路の里は最初の活動がうまくいかず、神父も次の活動を模索しているときでした。私が悩んでいることを話すと、薄田神父は「それなら旅路の里で一緒にやりませんか」と、いうようなことを言ったような…とにかく、溜まり場と仲間を求めている「ハイエナ状態」の私たちは、「少し場所をお借りします」という遠慮がちな態度は最初だけで、次第に旅路の里をまるで自分の家のように出入りし、そして薄田神父を自分のオヤジのように慕って、甘えて、そんな状況になっていくので

書には何と書いてある！」「上着をとられたら下着も差し出せと書いてあるやろ！おまえそれでも神父か！」そんなやりとりがあるかと思えば、廃品回収を終えて空のりヤカーを引いてきたKさんが「神父これカンパヤ」と小銭を握ってやってくる。通称「班長」は、飯場から帰ってくると、必ず近鉄百貨店の地下で荒巻シャケを買って「しんぷーおみやげや」とやってくる。

旅路の里を拠点とした活動が盛んになると支援者だけではなく、労働者や労働運動をしている活動家、地域で育った若者などもひっきりなしに出入りするようになります。夕方の旅路の里の玄関は、仕事帰りの労働者の地下足袋が並び、誰かが「ここはジカタビジの里やなあ」と言いました。

人が集まると情報も集まる。相談し合えばいいアイデアも浮かぶ。そして誰かが動き出す。まるで小さなコミュニティセンターのような場でもありました。

### 旅路の里と協友会

旅路の里は、協友会にとっても重要な存在となってきました。薄田神父の申し出で旅路の里に協友会の事務



局を置くようになってから、協友会内の連携が強くなっただけでは無く、協友会という狭い枠を超えて、地域の様々な活動や運動とより一層繋がるようになりました。

釜ヶ崎の労働者の置かれている状況が変化した時も、そのつど見落とすことなく協友会として対応できたのは、旅路の里でできた繋がりのおかげであり、それは今後も引き継がれている大切な財産だと思っています。

一時期、協友会のメンバーであり旅路の里に出入りする者が労働者と共に弾圧（逮捕）されることが続きました。私もその一人ですが、これも旅路の里が労働者と共に行動してきたことを証明しています。

もう一つ重要な働きとして、研修の場としての役割です。一人でも多くの人に釜ヶ崎の現状を知って欲しい。一緒に考えて欲しい。これは協友会全体の願いでしたが、旅路の里がその役割を担っています。今後もセミナーや研修を活動の柱として、釜ヶ崎での体験学習を続けて欲しいと思います。

あらためて旅路の里に感謝。

旅路の里での思い出や、旅路の里で今も続く重要な働



1960年代前半の釜ヶ崎銀座通り

きはとても書ききれません。ただ、個人的にはこの機会に感謝の気持ちは伝えたいと思います。

ちょうど旅路の里と同じ年数を釜ヶ崎で暮らし、その約半分は旅路の里を中心に生活をして、旅路の里で出会った人達に育てられてきたように思います。旅路の里という存在が無ければ、そして出会いが無ければ今の自分もありません。ちなみに連れ合いのマークと出会ったのも旅路の里です。

一方で、旅路の里の懐の広さと優しさに甘え過ぎて、迷惑もかけてきました。限りあるスペースを占有して寝泊まりし、しまいには飼い猫まで連れていってしまいました。薄田神父や高崎さんやすみれさんには迷惑をかけたことと思います。「居候」として旅路の里の活動にお返し出来なかつた分、今後も何かと協力させていただきます。

英神父の後任で高山神父がこられたことで心強いばかりです。これからも釜ヶ崎の労働者や地域の人々が「人が人として」生きていけるよう、共に闘っていきましよう。

## 感謝のことば

イエズス会社会司牧センター旅路の里 所長 高山 親

旅路の里の創立25周年を迎えて神様を讚美し、長い間この事業を支えてくださった皆さまに心から感謝いたします。

25年と言えば、一人の人が逞しく立派な青年となって周囲の人から期待されていくようなイメージが浮かんできます。旅路の里の場合はどのように成長して、どんなことで釜ヶ崎の労働者・野宿者に貢献できたでしょう。それは、この記念誌に寄稿してくださった多くの方々からの評価によって、今後の存続と繋がっていくような結果になるのではないかと思います。

旅路の里の誕生の時代に、釜ヶ崎は日本最大の寄せ場でしたが25年後の今はすっかり変わってしまいました。かつて毎日2〜3万人の労働者が釜ヶ崎からいたるところに出かけていき、自分たちの労働力を尽くして日本社会を支えてきました。しかし、今の時代になっては、もはや社会の誰も労働者の苦勞を思い出さず、彼らの存在さえ認識していません。あるとすれば「社会のくず」と

して「ポイ捨て」あるいは「燃え尽きたらもうそくの残骸をどのように始末していくか」というような扱いにすぎません。野宿者排除、ホームレス襲撃事件、住民票抹消などで、それが毎日に顕著になっています。

こういう状況の中にあって旅路の里は、釜ヶ崎の環境に添った対応が求められています。釜ヶ崎にあるかぎり旅路の里はこの地域に居る日雇い労働者や野宿者とともに過ごしていく使命があります。創立当初から薄田神父や英神父が築いた功績を思い出し、同じ目的を目指しているキリスト教協友会の諸団体と連携しながら、釜ヶ崎と外の世界との窓口という役割を担っていきたくて願っています。幸いに、旅路の里では、年々、全国から多くの中・高・大学が学生を送り、釜ヶ崎での体験学習やボランティア活動を通して、日本の若者に学ぶ機会を与えています。

イエズス会社会司牧センターとして、釜ヶ崎にあることは「貧しい人々とともにあること」「貧しい人のように

生活する」という特徴を持っていますが、主体である日雇い労働者や野宿者を忘れずに彼らの存在意義に添って変わって行かなければなりません。

こうして、25年間、多くの方々からの協力と犠牲によって基礎を固めてきた旅路の里は、釜ヶ崎の人々と共に成長し、一緒に耐え忍んできました。この機会にともに歩んでくださった日雇い労働者や野宿者に感謝し、旅路の里を利用してくださった方々に感謝して、ともに25周年の記念を祝いたいと思います。

日本社会の変動の最中で移り変わっても変わらない釜ヶ崎の善さ、流され強いられても潰されない人々とともに今後の25年を頑張っていきたいと願っております。



# 創立からの歩み・出会い

## 旅路の里事始め

### 一 旅立ち

よく釜ヶ崎に生活をしようとした動機は何ですかと問われる。それに対しては、若い人々の疑問に答えるためでしたと返事する。私が東京の聖イグナチオ教会（麹町教会）で助任司祭として務めたのは一九六六年四月から一九七〇年の四月までちょうど第二次安保紛争で大学の構内はどの大学も騒然としていた。その頃学生はよく尋ねた。「先生はどうして司祭になったのですか。職業として選んだのですか。このような大きな教会で神父さま！神父様！と呼ばれることは気持ちのよいことでしょうかね。でもキリストは、教会は貧しい人々のためといったのではないですか。」質問に答えるために修道会がいろいろと施設を運営しているなどと答えながらも我ながら言葉に

力がないなと思っていた。

一九七〇年から七八年にかけては神戸の六甲教会の主任司祭として働くことになった。その頃、イエズス会は第二バチカン公会議の後を受けて総会を開き、第三十二総会（一九七四年より一九七五年）において有名な第四教令を發布した。「今日におけるわたしたちの使命＝信仰への奉仕と正義の推進」のタイトルのもとに現代におけるイエズス会はもっと貧しい人々との関係を大切に、「決然たる態度をもって不正と抑圧されている世界に関与することが大切である」と呼びかけた。この呼びかけに応じて日本のイエズス会も具体的に何ができるか、第三修練が終わっているイエズス会士も体験のチャンスを求めようということになった。その体験の可能性を求め、体

験の場がどこにあるのかを具体的に尋ねる役目が私に廻ってきた。そこで短期間でも体験し、お手伝いできる場があるだろうかといういろいろな施設に手紙を記した。殆どの施設から丁寧なことわり状が届いた。一九七七年頃のことである。唯一ヶ所、大阪西成区萩之茶屋（通称釜ヶ崎）に老人食堂を運営するフランシスコ会の「ふるさとの家」からいつでもどうぞという返事がきた。そのときの責任者がクヌーゼンベルグ・ハインリッヒ神父である。

ところで私は七八年より聖イグナチオ教会で主任司祭を務めるようとの任命を受けた。教会が大きすぎるので当惑し少し考える余裕が欲しかった。そこで司牧生活も十年以上になるので少し勉強したい。そしてその期間を釜ヶ崎体験にあてたいと許可を願ったところ許可がでた。

### 二 ふるさとの家

体験をする前に様子を見ておこうと生まれて初めて釜ヶ崎を訪ねた日のことは忘れられない。一九七八年三月のある日、ハインリッヒ神父に教えられた通り、地下鉄御堂筋線に乗り動物園前で降り、いわゆる萩之茶屋銀座を歩いてみて驚いた。「貧民窟」を想像していた目の前に

展開しているのは立派なホテルの連立である。しかも料金を見て再び驚いた。一泊四百円～六百円（七八年当時）とあり、安いのである。そして窓を見るとキッチンと並んでいるが小さい。しかも外から見ると三階建てであるが途中で仕切られていて実質六階であることは歴然としている。いわゆるカイコ棚式（立って半畳、寝て一畳）なのである。

言われた通り歩いて行くと向かって左に消防署があり、隣に「ふるさとの家」がある。恐る恐る入ると労働者の人たちがこちらを見ている。ハインリッヒ神父にはすぐにお会いできたが、開口一番「お待ちしていました。私は、四月から休暇でドイツに帰るから明日からでも代わりに来て欲しい」と言われる。これには驚いた。初めての人間に明日からでも来て、しばらく代理を務めて欲しいといわれるのである。「何をされるのですか」と聞くと「何もなくてよい。ただ夜には泊まってほしい」と答えられる。全く肝を抜かれてとりあえずその日は夕食を頂いて帰ることにした。「ふるさとの家」は午後四時開店でノレンを出すやいなや労働者の方々がぞろぞろと入ってくる。老人食堂で五十才以上の年齢制限があった。あと

出雲カトリック教会 主任司祭 薄田 昇

で聞くと五十才すぎると日雇い労働は無理になるのである。従って五十才すぎてバタ屋さんをはじめ人も多い。手押し車でダンボール箱のほぐしたのを山のように集めると四十円位の利益になる。だから「ふるさとの家」の最低値段は四十円である。バタ屋さんが堂々と注文できるためである。

「無料にすれば人を物貰いにします。しかし料金を払えば堂々としたお客様です。しかも自由にメニューが選べます。」しかしそのためにどの位の赤字であるかを店の責任を持って青年から聞いた時ため息が出た。その赤字の殆ど全額をドイツの恩人に依存しているのである。またそのために近隣教会の婦人会が奉仕をしていた。品数は毎日十四種類位であった。

私はとにかく休暇を「ふるさとの家」で過ごすことに決意した。六ヶ月の体験は教えられることばかりだった。最初の夜廻りの体験も忘れられない。「ふるさとの家」の前に一人の労働者が野宿をしていた。一緒に廻っていた愛徳姉妹会のシスターが「この人は神父ですよ」と声をかけると「神父さんか？わしはペドロだ。長崎の出身だ。小さい時はミサ仕えもしていたが今はこんなになっ

てを焼き、又給仕しては何回もお釣りを払うのに手間どっている私を彼らはニヤニヤしながら見つめていた。彼らバラ銭をにぎりしめてくる。食べた皿の数を調べ、計算し、暗算し、釣り銭を渡すのは大変だった。しかしこのバラ銭には彼らの労働の汗がにじんでいた。ある老人は、夏は「冷ややつこ」しか食べなかった。「四十円！」百円を出すので六十円のお釣りを渡そうとすると微笑んで「それは貧しい食べられない子供のために使つて下さい」と壁に指さす。そこには「今世界で沢山の子供たちが飢えています。」とポスターがはられていた。

親しくなると質問されるようになった。「どこから来た。」「神戸から来ました。」「ふむ。そしていつまでいる。」「六ヶ月たったら東京に行くように命令を受けています。」「東京か？お前たちはいつも命令だ。命令だといっては俺たちを見捨てていく。」これは痛い言葉だった。又本当に貧しい人との関わりを持つとは共に住むことではなかったのかと考え始め管区長と相談した。管区長は「大切な考えだが、とにかく命令は命令。一応東京に赴任するように」と言われた。

てしもうてミサに参加するのも恥ずかしい。神父さん、明日は日曜日やな」と答えた。私は何を答えてよいのか分からなかった。彼は、ある日血を吐いて死んでしまった。釜ヶ崎には長崎の炭鉱閉山と同時に多くの長崎の信徒の労働者も来ていたのである。

キリスト教協友会との出会いも大きかった。キリスト教会のエキユメニカル運動の実践をここでは現実にやっていたストロームさん、ハインリッヒ神父、金井愛明牧師、重野牧師、小柳伸顕牧師の名を心に深く刻んでいる。あの頃の釜ヶ崎には顔があった。彼らはこともなげに言った。「倒れている人がいるなら一緒にやるのは当然でしょう。」そしてストロームさんが大切にしていたのは「そのためにこそ共に祈る」ということだった。

### 三 ふるさとの家で学んだこと

「ふるさとの家」を手伝っている間に多くの労働者と知り合った。彼らは街で会ってもよく立ち話しをしてくれた。私が「ふるさとの家」で手伝っていたことは開店までは「だしまきたまご」を焼くことであり、開店と同時に給仕をすることであった。慣れない手つきでたまご



### 四 イエズス会社会司牧センター

労働者との約束もあり、体験を続けることは大切と判断して聖イグナチオ教会の主任司祭をやりながらも月に一回釜ヶ崎に通い、また東京の山谷にも手伝いに行った。ハインリッヒ神父と将来のプランについて相談している中でイエズス会はイエズス会らしい奉仕をして欲しいと言われた。また看護師さんとして奉仕していた入佐明美

さんが、労働者が病気になる入院すると退院する場所がないためになかなか退院できないばかりでなく、病院で死亡するケースが多い。だから退院後安心して生活できる「社会復帰の家」が是非必要だと言われた。よい仕事だ。やってくれないかと言われると出来るか出来ないかわからないのに「ハイ」と引き受けてしまう悪いくせが私にはある。「やってみましょう」と答えてしまった。そして次に東京から行ってみるとハイインリツヒ神父がイエズス会の未来のプロジェクトのために家を買ってしまっただと言われる。これには正直に驚いた。古くなって使用できずに売りに出された労働者のための日払いアパートであった。管区長に報告すると目を白黒させたが「まあよいだろう。しかしあくまでもフランシスコ会のもとで奉仕するというミッションだ」と念を押された。

旅路の里に住むようになったのは一九八三年の四月からであるが、最初は朝から晩まで掃除に明け暮れした。そして雨漏りと闘った。全く「古屋の漏り」で釜ヶ崎に行くや否やの梅雨空がうらめしかった。大工さんに来て貰って屋根を修理し、一応住めるようになった時、旅路の里の許可第一号を貰った。それは大阪教区長に一つの

イエズス会社会使徒職委員会の指導のもとに一ヶ月に一度集まり「社会司牧センター指針案」を練りあげた。一、実践 二、反省 三、社会構造分析 四、神学的考察 イエズス会全体で取り組んで行こうということになり、いよいよ宗教法人イエズス会社会司牧センター「旅路の里」として正式に出発することになった。法人資格を得るために大阪府庁に申請に行ったら「宗教法人がこのような活動をするには素晴らしいことですね」と言ってくれた。

社会司牧センターの活動として各学校の体験学習や定期的な夜廻りやボランティア活動があり、その日その日必ず反省会があったが、これは熱っぽく朝まで続くことも多かった。シスター方も多く参加して下さり、イエズス会の修練者も次々と来てくれた。難しいことはこの反省会からどのように学問的分析が行われ、未来を読み取り、神学的考察にと持って行き、救いをもたらす「釜ヶ崎希望の神学」をどう樹立して行くかであった。そのため後継者を養成することは絶対必要なことであった。

いろいろな方が訪ねてきて下さり励まし、助言を与えて下さった。中でもマザー・テレサが初めて日本を訪問

部屋に「聖体」を安置し、聖堂とする許可だった。「聖櫃を床の上にじかに安置しないように。部屋はあくまでも聖堂に相応しいように整備すること」との条件で許可が出た。早速よく出入りする労働者に頼んだ。彼は呑み込んでくれたが「キリストの部屋だ。お前は宮大工だ」というと喜んで本当に丁寧に作業してくれた。賃金は一切受け取らなかった。

こうして何人かの労働者と社会復帰のために活動を始めたが成功しなかった。それは、一人の滞在期間が三ヶ月で短すぎたこと、お互いに共同生活を行うことの難しさにあったが、労働者の生活も習慣も知らずに彼らの指導者になろうとした高慢が第一の原因であった。そして先ず手伝ってくれる学生が悲鳴をあげた。慰めは共同生活を体験した全員が洗礼を受けてくれたことであった。

社会復帰の家は一年近く続けて止めることになったが、その間に中高大学生の体験学習やボランティア・スクールのようなものが形づくられてきた。多くのミッションスクールが男女共体験の場として利用して下さった。それがもとになって「社会司牧センター」の構想が生まれできた。

されて時、わざわざ訪ねてこられミサに与り、食事を共にして下さったことは嬉しいできごとであった。また総会長コルベンバツハ神父も来日した時、わざわざ訪ねて下さりイエズス会の仕事として認めて下さったのは嬉しいことだった。その時少し休息をとりなさいとも勧めてくださった。

ちょうど次をどうしようかと考えていたし、釜ヶ崎には沖繩から多くの労働者が来て働いているのを知って、その実態を知りたいとも思い、一年間の沖繩体験を管区長に願ひ許された。しかしそれが石垣島の主任司祭の任命につながって行くとは夢にも考えなかった。

釜ヶ崎で生活していた頃を思い起こすと、まずお世話になった方々のことを思い出す。私の活動に対して理解してくれ、更に物心両面で様々な犠牲を払って援助してくれた。一人ひとりとの出会い、協力といった内容をここで詳しく書きたいと思うのだが、あまりにも多くの方々に触れなければならぬので、割愛させていただくことにした。ただ、この場を借りて心から感謝したい。また最後になってしまったが、旅路の里の今後の発展を祈りながら、筆を置くことにする。

## 旅路の里で暮らして

旅路の里 前所長 英 隆一朗

旅路の里とのかかわりは2回ある。1回目は25年前、旅路の里が開設した当時、ときおりボランティアとしてかかわっていた。その後、一度はそこで働いてみたいという夢を抱きつづけていたところ、とうとうイエズス会員としてそこで働けるチャンスが巡ってきた。そして2年半ほど、責任者としてそこに住んでいた。そこから離れてから3年以上になるが、今でも釜ヶ崎という街に心から感謝している。

釜ヶ崎の街の真ん中に実際に住んだという体験が、わたしにとって何よりもよかったように思う。豊かな日本の社会に暮らしていると、どうしても見落としてしまうものがある。それは貧しさの現実である。もちろん日本社会のどこにでも貧しさを見いだせるだろう。しかしながら、物質的に満ち足りた修道院の生活をしながら、清貧の誓願を生きる矛盾に何か耐えられない思いのようなものをずっと抱いていた。

釜ヶ崎に暮らすことで、自分が貧しくなったというこ

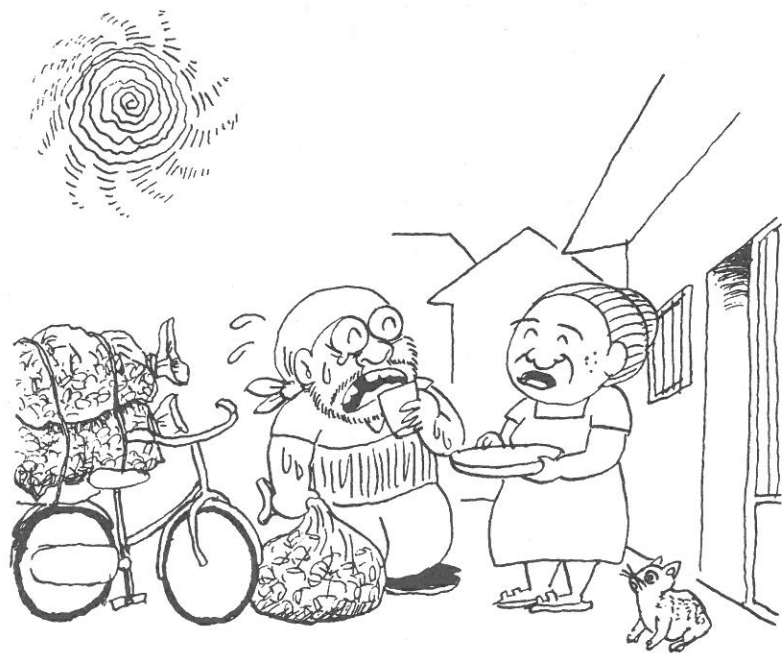
とばが真に迫ってきた。例えば、「貧しい人に福音を宣べ伝えるために」(ルカ4・18) 来たというイエスの思いに、やっと触れられたように感じる。「貧しさ」や「福音」が大きな重さでこの身に迫ってきた。それまで神学生・司祭として長年勉強しながら、イエスの心も聖書の意味も何も分かっていなかったとつくづく思う。釜ヶ崎に住んで、やっと少しだけだが、みことばの重さに触れさせてもらった。

釜ヶ崎における旅路の里の存在価値はいったい何だろうか。ある意味では、イエスの心に触れ、それを悟る場であり、さらに人びとと分かち合っていく場なのかもしれない。旅路の25周年にあたり、次のような願いを抱いている。旅路が福音の変わらない価値を知らしめる場であってほしいと共に、釜ヶ崎と日本の移り変わる状況に合わせて、その時々々の貧しい人びとのニーズに応える続ける場であってほしい。

とはない。質素な衣食住であったが、ホームレスになる心配は全くないので、貧しさを生きたとはとても言えない。貧しくなったわけではないが、たしかに貧しさの現実に触れる恵みがあった。釜ヶ崎という街の現実と、そこに暮らす人びとの人生から貧しさがにじみ出ていた。それは実際に、差別と不平等の現れであり、底辺に生きることの厳しさそのものである。

例えば、夜回りをしているときに出会ったホームレスの人がこうつぶやいたことがある、「俺は読み書きがでけへんねん。履歴書が書けへんし、普通の事務の仕事ができへん。それで日雇いの仕事をずっとしてきて、ついにアオカン(野宿)や」。貧しさは、育った環境や教育の不平等や差別の連続の総体として生まれるものなのだ。

その場に暮らし、貧しい人びとの息づかいを聞き、そのただ中で祈ったことが何よりの恵みだった。旅路の聖堂は二畳ほどの広さで、となりのビルの人の寝息が聞こえるところだった。そこに身をおき、祈っていると、み



## 「旅路の里」で

歌手 新谷 のり子

薄田神父さんからいただいた『私の聖書、釜ヶ崎のひとびとに教えられて』を時々開きます。どの箇所にも胸がつまり涙ぐみ労働者を通して働いておられる神への賛美と新たな信仰への決意をうながしてくれれます。

表紙の裏に「今年もありがとう」の文字、そして1988年12月25日と神父さんのサインがあります。困難な課題をいくつも越えられて大阪、釜ヶ崎の日雇い労働者と共に生きようと神父さんが開設した「旅路の里」。薄田神父さんとの出会いの時と共に私にとっても大切な場所となりました。

「25年になるのよ。何かメッセージを」と高崎恵子さんから連絡をいただいた時間、たとえようのない優しい風が電話の向こうから吹いてきて感慨無量になりました。この25年間、「旅路の里」を通じて私と同じ体験を数えきれない程の人々がし、生かされている人生にインパクトをいただきその後の自分の道歩んでいることか。

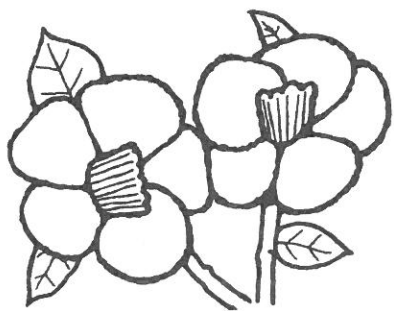
5年程前、「旅路の里だより」に小さな文章を載せてい

ただきました。「ただいまー」とわたし。「お帰りなさい！お疲れ様！」と事務机で仕事の高崎恵子さん。暖かい笑顔がたまらなく嬉しい。「旅路の里」を「私の下宿」と図々しくも勝手に決めて受け入れていただき、月に数日、釜ヶ崎で過ごす毎日は私にとって大切な時間となっている。十数年前、夏祭りや越冬支援コンサートに参加しはじめた頃から「旅路の里」は私の身のよせ場だった。ステージを下りて労働者の中に少しでも溶け込みたいとの思いから温熱療法の資格を取得し「ふるさとの家」の片隅で治療をさせていただいた3年程前からは「心の拠り所」ともなっている。不況により失業者は急増し社会を覆う暗雲が一番最初にここに生きる人々におそいかかる。限りある時間の中、全身全霊を傾けて外部との橋渡しの雑多な仕事をしている高崎恵子さん。それを支えるすみれさん。祈りを学ばせて下さる神父さん。「旅路の里」に集う多数の善き人々。日本社会を「平和」と思い違え、惰眠をむさぼってきた日常生活から、イエスと共に「下

へのぼる」生き方を考えさせてくれる分岐の場所とでも云おうか。大きさより小ささ、物質的豊かさより貧しさ、地位の高さより低さ、強さより弱さ、一人一人の命、競争に勝つことより共存共生することの意味。教えていただいた価値観。「旅路の里」のドアを開けるといわゆる世間の価値観と異なった社会が見えてくる。」

年月が重なりこの時点より更に更に社会は悪化の一途を歩んでいると思います。「人間の尊厳」という言葉さえ空しく響く社会。「希望」より「絶望」が充満する社会。だからこそ新たな一步を踏み出す困難さと大切さを「旅路の里」に見出します。支え合って励まし合って共に集う場所としてこれからも。

伝えきれない程の感謝と喜びのうちに。



## 「釜ヶ崎」に行く意味

サビエル高等学校教諭 大曲 多佳子

最近のワークキャンプでの分かち合いで、ある生徒が言った言葉が忘れられない。「夕飯を食べに出かけた時、途中で雨が降ってきました。ガード下で雨宿りをしながら、おじさん達が荷物を抱えて移動する様子を見ていました。寝場所と決めていた所が濡れてしまった人はどこへ行くのだろうと思うと、たまらない気持ちになりました。」

生徒と一緒に釜ヶ崎に行くようになってから18年になる。初めの頃は驚きと緊張とで引率とは名ばかり、生徒と同じ一参加者として感激したりおろおろしたりであったが、回数を重ね余裕が出てくると、あれも見せたい、これも知って欲しい、いろいろ教えてやらなければと、教師根性が頭をもたげてくる。というより、私に経験者、生徒に初心者という意識と言ったほうがいいかもしれない。ところが、そんな序列意識も、しばしば先のような発言によって打ち砕かれてしまうのである。この生徒は雨に濡れるおじさんの辛さや惨めさや不安を、我がこと

のように感じ取ったに違いない。そして、彼のその夜の寝場所のことを本気で心配したのだ。沖繩の言葉で言う「ちむぐりさ（肝苦しい）」という感覚、私がいつの間にか麻痺させてしまったものだ。共感する力においては生徒の方がずっと上である。

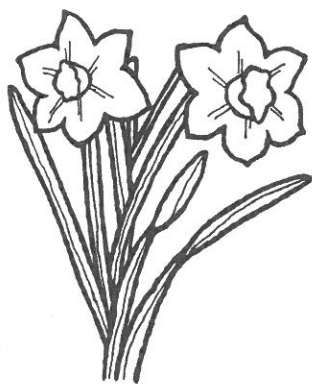
年に一度か二度、釜ヶ崎に行くことにどんな意味があるのか。わずかに二泊三日の滞在で夜回りをしたり炊き出しを手伝ったりしても、それはボランティア活動の名にも値しないだろう。多くの生徒にとっては一生に一度だけの訪問である。釜ヶ崎は何も変わらない。しかし、体験した者にとって、ここで得たものはかけがえのない意味を持つ。

ある生徒は夜回りの際に衰弱したおじさんと遭遇し、救急車で運ばれたその人がその後亡くなったことを聞いて大変ショックを受けたと言う。苦しんでいる人を前に、何もできなかった自分の無力さに打ちのめされたようだ。ある生徒は眠っている人を起こしてしまい怒られるだろ

うと思っていたら、「ご苦労さん、おおきに」と言ってくれて嬉しかったと語る。おにぎりを渡そうとしたら、「隣の人は昨日から何も食べとらん。わしはええから、渡しなっ」と言われ、感激した生徒もいる。生きることの厳しさ、命の重み、人の優しさや温かさ、そして、日々の暮らしの有り難さが、ここではダイレクトに迫ってくる。怖い所、家の無い可哀想な人たちというイメージは払拭され、深い感動に胸を熱くして生徒達は帰って行く。そして、家族に、友達に、その思いを語るのだ。

以前、薄田神父様が、「釜ヶ崎ではクリスマスに馬小屋を飾らない。ここが馬小屋だから。」

と言われたことがある。どこにも泊めてもらえず、世の片隅で生まれた幼な子を、救い主として拝んだ羊飼いやに与えられた福音。そのよろこびのメッセージが確かにここにはある。そして、釜ヶ崎を体験した者には刻まれるのだ。意識するしないに関わらず、世の「豊かさ」を相対化する視点が。釜ヶ崎で元気をもらった私達は、今度は自分の生活の場でいかに生きるかが問われている。





## 社会司牧センター旅路の里25周年おめでとうございます

ふるさとの家 マーコ

私が旅路の里に世話になり始めて18年になります。薄田神父がいた頃の旅路の里は、若者のたまり場で、みんな家にも帰らず居候状態。私もその一人でした。仕事から帰るとみんなが「おかえり」と暖かく迎えてくれました。風呂上りの神父と一緒に飲んだり、セミナーや宿泊、夜まわりに来たたくさんの人と交流ができ、いつも楽しかったです。夜中まで盛り上がり、神父に怒られたこともしょっちゅうでした。宿泊者のための部屋を占領したり、宴会で食堂を汚したりと迷惑をかけた上、「ごめんね、部屋空けてくれる」と高崎さんに言われるまで居座り続けるほど、旅路の里は居心地がよく「我が家」のような存在でした。労働者もよく話しを聞いてくれる神父を頼りにして来ていました。普段はしっかりと「人の世話にならない」という風な労働者が、たまに酔うと「しんぷ〜」と来て玄関で座り込み、泣いて神父に甘えていました。

いろいろな経験ができた旅路の里に感謝でいっぱいです。

す。野宿者と若者たちは出会い方によって幸にも不幸にもなる可能性があり、そんな中で旅路の里のセミナーは大切な啓発活動になっています。これからも釜ヶ崎と社会との架け橋となり、多くの人に真実を伝えてくださることに期待しています。

その後、旅路の里で出会った吉ボンとも結婚し、今、2人の娘がいます。

薄田神父の転勤後、旅路の里がなくなるかもという話もありましたが、オマリー神父、英神父、今の高山神父が受け継いでくださり、スタッフの高崎さん、すみれさんが共に支えて続けてくれています。釜ヶ崎のセミナーハウスとして、本当にたくさんの学生やセミナーを受け入れ、「釜ヶ崎の現状を伝え、考える場」として活躍しています。私が働くふるさとの家にもいつもたくさんのセミナー参加者を案内してくれます。そして利用者（労働者、野宿者）のために、高山神父が週二回、散髪に来てくれていますし、高崎さんやすみれさんが忙しい合間をぬって、ふるさとの家で利用者に提供するための物資を用意してくれます。

今、若者が野宿者を襲撃する事件などが増えています。が、セミナーなどに来る若者は、野宿者の問題は社会や自分たちに関わっていると感じることができると思いま



1960年代前半の釜ヶ崎 日雇労働者求人場所

## 「釜ヶ崎」「旅路の里」との出会いをふり返って

六甲学院中学・高等学校教諭 青木 一博

ものごころついたときから、「釜ヶ崎」という地名は不思議な地名だった。たしか、中学生のとき、地図で懸命に探した記憶がある。でも見つからなかった。耳にはするが、地図にない街。それが最初の記憶であった。

その「釜ヶ崎」が、再び身近なものとなったのは、今の勤務校に勤めたことがきっかけである。勤め始めた最初の頃、何かの折に、「旅路の里」での研修会があるということを聴き、何もわからず参加した。(そのとき、私の心の「何か」が変わった。)以来、20年余りになる。私にとって、「旅路の里」は最初に「釜ヶ崎」と出会わせてくれた場であり、それを通して「現代社会」の構造や多くの「先輩たち」の生きざまを教えてくれた、貴重な空間である。つまり、貧困・部落差別・精神障がい・出入国管理・外国人登録・DV・管理社会・虐待…そして、「犯罪」と呼ばれている現象の実態に至る「構造」。弱さと強さ、愛と無関心、何が優先課題か、一人ひとりへの呼びかけとしての召し出し(vocation)の多様さ…。多くの場

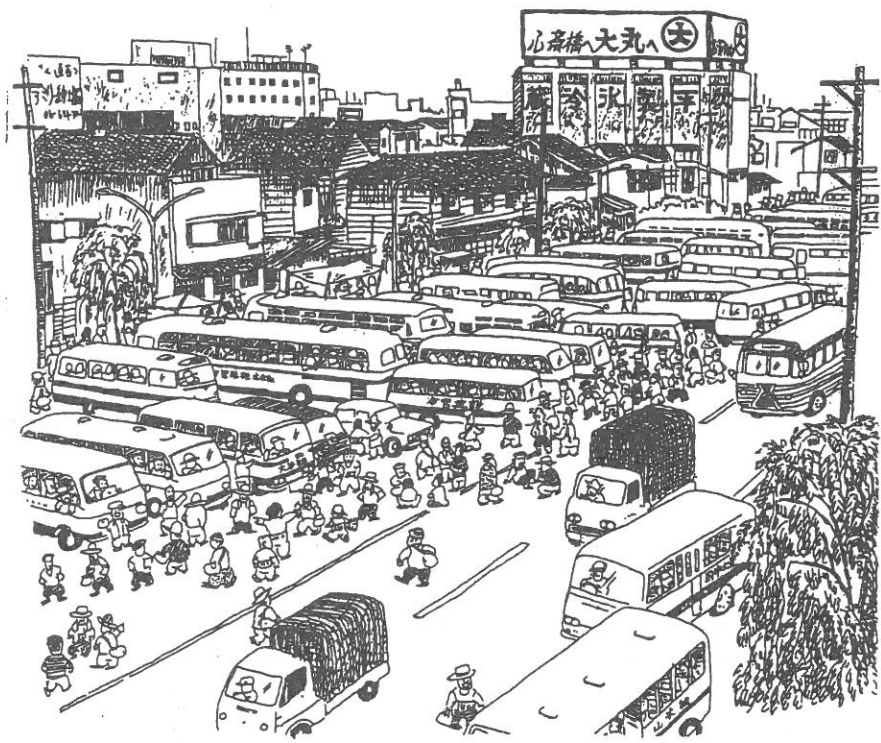
合、「問題」は当事者に在るのではなく、彼らを取り巻く社会の欠落の問題である、という気づき。

生徒と共に泊まったことも何度もあるが、一人で泊まらせてもらった経験も大きい。あるときはボランティア、あるときは黙想、そしてあるときは帰れなくなってしまったとき…。息子たちが小さかったときには、2階の廊下をドタドタ走り回って、神父さんに「君たち、もう帰ろうね！」とヤンワリ「退去！」を促されたのも懐かしい思い出である。

最初、釜ヶ崎へ行くのは冬の行事だった。しかし、釜ヶ崎には、春も夏も秋もあるのだということを知って、くれたのも「旅路の里」だった。そのことで、釜ヶ崎がずいぶん身近になったものだ。ただ、行くとともに、何かしら新しい発見をさせてくれることは今も変わらない。

25周年と聴いて、改めて考えてみれば、「旅路の里」とは不思議な名称である。この不思議な場所との不思議な出会いの数々が、今日もまた、私たちの謎に満ちた「旅

路」の「不思議」を生きる新しいエネルギーとなることを、只々折るばかりである。多くの感謝と共に！



1960年代末期の釜ヶ崎 日雇労働者求人場所

# 体験学習感想文

## 賢明女子学院中学校・高等学校

花尾 美加 (高2)

私は再び釜ヶ崎に戻ってきました。昨年と変わらず、おじさん達は貧しかったです。今回は雨が降っていたので炊き出しは中止になりました。雨の日は、炊き出しもなく、夜は道や寝ている時着る毛布がぬれます。おじさん達にとって今日はとてもつらい日になったと考えました。

実際に、越冬パトロールで見たおじさん達の毛布や荷物はビショビショでした。風も強く、雨をしのぐことは困難でした。それでも私たちが声をかけると、反応をしなければくれ、わざわざ体を起こしてくださる人もいました。みなさんは「ありがとう」という言葉をよく使います。素直で優しい人達でした。私は、おじさん達を元気づけよ

の現状を決して忘れないこと、姫路に戻っても毛布を寄付することを決意しました。今年は、それに加えて心からおじさん達を愛し、救いを求めている人々を受けとめ、支えになるように一歩一歩進み、壁をなくすことを目標とします。(2006年12月)

白井 実佳 (高2)

今回が初めての参加で、まさかこんなにひどい状況だと思わなかった。特に印象に残ったのは夜中のパトロールの時で、どれだけ自分が恵まれた環境で育ってきたかが身にしみた。

「路上で生活している人たちは、おやすみ」と言われないし、言っただけでいいのよ」この言葉が本当に重くのしかかった。私たちは普段、寝る前に何気なく使っている言葉。でもホームレスの人たちは自分たちのように暖かいベッドやふとんの上で寝ているわけじゃない。ちゃんと朝がむかえられるかわからない状況にいる。寒くてなかなか寝ることができない。これらが「おやすみなさい」と言っただけでいい理由。

これをリーダーの人に言われた時、自分で自分がすこ

う！とか、助けたい！と思っていました。今回もまた、おじさんから何かを与えられた気がします。感謝の心、親切な心、助け合いの精神など、私たちが普段忘れがちな、でも人間として一番大切な心を思い出させてくれました。

私は今回も自分のできることの少なさに嫌気がさしました。もう子供ではなく大人になった私には、救いの手を求められる機会が増えました。しかし、私は少しずつ壁をつくっていました。醜い感情が心の中にあるのです。だから、救いを求めている人を見て見ぬふりをしている自分がいました。誰も助けることができず、壁が厚くなっていくのがすごく嫌で私は何回もボランティアに参加しています。慣れというものもあると思いますが、一番大切なのは気持ちだなと考えました。

釜ヶ崎はとても身近におじさん達を感じることができません。昨年私は、おじさん達をもっとよく知ること、こ

く情けなくなった。うわべだけで何もわかっていなかった。その後から声をかけるとき、言葉を選んで話しかけた。そんな風になっているうちに一人のおじいさんと出会った。そのおじいさんはお酒を飲んでいて歩くのもままならない状態で、私とそこにいたホームレスの方の2人で医療センターまで運ぶことになった。腕をかかえてゆつくりと歩いている時も「大丈夫ですか?」「寒くないですか?」のふたことしか声をかけられなかった。医療センターに着いて、少し熱があったみたいで救急車を呼ぶことになった。その時でさえまわりの状況を見ることしかできなくて何もできない自分がぐちゃぐちゃで、涙でそうになった。

救急車が到着して、生まれて初めて状況説明をした。ちゃんと伝わるか不安だったけど、病院に入ることができるといい。本当に良かったと思った。唯一、私ができること。たったそれだけ。

たくさん死んでいる現在の日本の中で、1%にみたないぐらいの割合で餓死する人々がいる。物にあふれたこの日本で。私たちはその現実から目を背けてはいけないし、今日この目で見たことを決して忘れてはなら

ないと強く思った。(2006年12月)

## 栄光学園中学校・高等学校

青木 真澄 (高1)

中学3年の倫理の授業で釜ヶ崎のことが扱われた。その時僕は釜ヶ崎の人たちのことを「気の毒だなあ」という全く無縁な人間の立場からの感想しか持つことができなかった。大沢先生が、「来年実際に行ってみれば分かる」と言われていたので、その時から釜ヶ崎へ行こうと決めていた。

新今宮駅を出るとすぐに、授業のプリントの絵で見た職安センターの大きな建物が目に入った。釜ヶ崎地区が日雇労働者の町であることを改めて実感した。しかし、僕が想像していた釜ヶ崎とは幾分違って見えた。冬だからかもしれないが臭いはほとんど感じず、新しい建物も多く、見た目では他の地域との違いはあまり感じなかったからだ。だが、その後、地区内を歩き回り、周りとの相違点も多く見つかった。たとえば、1缶50円の自動販

り、寒さをしのぎつつ寝る人が多かった。僕たちが立って動いていても寒いのに、じっとしていたらどれほど寒いかしれない。一時的に食糧と毛布を配って回っても、現在の状況を改善できるわけではないであろうが、僕たちの活動によって飢え、寒さをしのぐことができる人が少なからずいるのだと思い、一生懸命取り組んだ。

この他に、朝から昼までの炊き出しの手伝いをし、その合間に労働者に対するアンケート調査を行った。年齢、出身地、炊き出しに対する意見、今年の抱負などを答えてもらい、皆で集計したので、釜ヶ崎全体の現状を詳しく知ることができた。その作業を通してこの人たちと直接会話をできたことが良い経験となった。「今年の抱負などない」「この先真っ暗だ」という人が多く、心が痛んだ。

アンケートを取りながら、ここにいる人たちはなぜこのような状況に陥ったのだろうと考えた。おそらく皆それぞれ理由で職を失い、釜ヶ崎へ行き着いたのだろう。会社が倒産しクビになった人、借金を返せなくなった人、家庭の事情で家を出なければならなくなった人、正しいことを主張したが社会の不正の渦によって陥れられた人

売機、無数のドヤ(日雇労働者向けの1泊1000〜1500円の宿)がある。頑丈な柵で囲まれ、鍵がかかられて入ることのできない公園、また、小中学校の塀沿いにプランターが斜めに不自然に並べられている、など。そうしたことは釜ヶ崎の人を排除するようなものを感じ、腹立たしく思った。

しかし、それ以上に釜ヶ崎に住む人たちの様子に意外さを感じた。職が無く、生活も苦しいのだから、皆暗い顔をしているだろうなと思っていたが、そうでもなかった。演歌をかけて焚き火をして道端で中古品を売る人、公園で数人で焚き火をしながら話し込む人々、野良犬(釜ヶ崎にはたくさんいた)と一緒に自転車で走る人などが、ある意味で生き生きとした生活をしているように思えた。この人たちはお金は持っていないけれど、その代わり僕たちが失った何かを持っている。高度経済成長以前の日本はこんな感じだったのかなとも思った。

と言っても、この人たちの生活の厳しさをひしひしと感じたのは夜回りであった。ドヤにも泊まることのできない人々は野宿を強いられる。その日は計200人ほどの人が野宿していた。段ボールと数枚の毛布にくるまもいると思った。だから、釜ヶ崎の人々を怠惰だとは言いつてもいい。彼らはかつては高度経済成長期に土木作業などの陰で日本の発展を支えてきた。今、釜ヶ崎は日本の現状を拝金主義が横行する日本社会への疑問を投げかける材料にしていきたい。(2006年1月)

吉良 圭 (高2)

釜ヶ崎。ホームレス。

こうした単語を目にしたとき、人がまず思い浮かべるイメージはなんでしょう。汚い浮浪者。仕事をしない怠け者。もつと言ってしまうえば社会の「ごみ」。そういうイメージでしょうか。どれくらいの人か思っているかはともかく、こう思っている人がいるのは事実です。でも、僕は今そんなイメージを少しも抱いていません。今年、釜ヶ崎を訪問したことによって、そのイメージは消え去ったのです。

そもそも、ホームレスの方々は偏見の目を向けられやすいのです。事実上彼らには家はなく、身なりも決してきれいとは言えません。そうした臭いや外見、そうい

ったもののために、彼らに向けられる偏見の目は厳しいものです。前述したように、ひどい場合には社会の「ごみ」という見方も生まれてしまうのです。

僕がそうした偏見をもっていたことも事実です。彼らを見て近寄りたいとは思わなかったし、ダンボールの中で寝ている彼らを見ても、いい気持ちはしませんでした。しかしです。こうした気持ちは、ある一つのことをきっかけに、僕の中で突如崩壊したのです。

それは、二日目の夜回り、夜に町を回って野宿している方に毛布などを配り、またその方々の安全、健康状態をチェックする活動が始まる少し前のことでした。この活動の説明の中で出てきた話題。

僕らが訪問した一日目の夜に、亡くなった方が一人出たという話でした。その方は、寒さでガタガタしながらも、安らかな表情で亡くなったと、越冬闘争に参加していた人が話してくれました。けれど、悲しかったのでしよう。話しながらその人の声は震え、涙が数滴、頬を伝っていたのを今でもはつきりと思い出せます。その人は、亡くなった方のことを本当に愛していたのです。その方を「仲間」と呼び、大切にしていたのです。それが、僕

てくださった先生方、ならびに釜ヶ崎で僕らに手伝いの仕事をさせてくださった、越冬闘争の皆様は感謝の意を表して、この文章を終わります。ともに活動しともに心を動かした広島学院、六甲学院、泰星学園の仲間たちにも感謝の気持ちを伝えます。(2007年1月)

## 同行して感じたこと

栄光学園教諭 望月 伸一郎

バブル最盛期からほぼ毎年行かせてもらっているが、やはり全体的に静かな街になったというのが、率直な印象だった。単に長期不況の影響ばかりでなく、携帯電話の普及が、日雇労働の市場(需要と供給が出会う場)としての釜ヶ崎の機能を少しずつ不要ならしめつつあるとのこと。釜ヶ崎で活動しておられる方々は、異口同音に「釜ヶ崎は労働者の街から福祉の街になりつつある」ともおっしゃる。炊き出しに並んでおられた人への聞き取りアンケートでも、半数近くの方が60歳以上であり、70歳以上という方も1割程度いらした。そんな高齢の方々を含めて、炊き出しには各日とも4000〜5000人の方が、寒いなか(特に2日目の午前中は吹雪だった)

にも痛いくらいに伝わりました。なんとか守ってやりたかった。だけど、それができなかったという、悲しみと苦しみ、僕の胸も締め付けられました。その時から、どうしてもホームレスの方々に「ホームレス」と呼ぶことに抵抗を覚えるようになりました。

その人の涙は、亡くなった方を含め、ホームレスの方々を「人」として見ていることから始まっています。彼らをホームレスという括りで見えてしまうのではなく、人としてみるのです。つまり、「人として大切に思う」には、「人として認めなければ」ならないのです。僕の中にあった意識に訪れた変化は、その変化でした。彼らを一人一人の「人間」として認めること。そうするようになった、いや、そうせずにはいられなくなったのです。

それでも、僕一人が変わったくらいでは、ホームレスの方々に向けられる偏見の視線というのは、厳しいまま変わりません。ですから、皆さんにお願いしたいのです。彼らを見てください。彼らに会ってください。彼らにふれてください。きっと、皆さんにも変化が訪れるはずですよ。

最後になりましたが、今回の釜ヶ崎訪問の機会を与え

じっと待っていらつしやう。その同じ場にいると、普段何も感じることもなく、もう慣れているはずの私でも、そこはかとなき疑問と、やるせない怒りと、重くにぶい無力感とがない交ぜになったような感情を体験した。

ふるさとの家でミサをしてくださった本田哲郎神父様の近著『釜ヶ崎と福音』(岩波書店)は、去年私が読んだなかでも最もインパクトのある本だった。貧しく弱い立場におかれている人々を通じてこそ、神はわれわれに働きかけている、という。神父であり聖書学者でもあったのに、貧しく無力な釜ヶ崎の野宿者から、心の解放と真の喜びとを、与えるのではなく、逆に、与えられた。師は、そうした体験をきっかけに、釜ヶ崎で生活しながら、聖書を読み解いている。この本の表紙に描かれている絵は、炊き出しに並ぶイエスの姿である。実際に釜ヶ崎に来て炊き出しに並ぶ人たちを前にしたとき、本の内容はもちろんだが、あらためてその表紙の絵の意味を考えないではいられなかった。

## 広島学院中学校・高等学校

沖 尚彦（高一）

「釜ヶ崎は危なそうなところだから行きたくないなあ。」これが僕の釜ヶ崎に対しての最初のイメージだった。ホームレスの人に絡まれたらどうなるのだろうか、など色々な考えが頭の中をめぐった。そのような偏見を持っていた僕だったが、釜ヶ崎へ行くための事前学習をしているうちに釜ヶ崎についてもっと知りたいという強い興味を持ちはじめ、釜ヶ崎へ行くことを決心した。

釜ヶ崎へ行く日が近づくにつれて僕は緊張が増してきた。釜のおっちゃんたちとうまく接することができのかなあ、などと色々考えていた。また、緊張と同時に釜ヶ崎の人の生活が見られるという楽しみもあったように思われる。今から考えてみると、非常に恥ずかしいことである。

当日、僕たちは旅行へ行くような感じで広島駅へ集まり、友達同士でおしゃべりをしながら気楽に過ごしていた。僕も、もちろん釜ヶ崎のことを全然考えていなかった。釜ヶ崎へ行く前の僕たちには、「釜ヶ崎へ行って勉強

をする練成会」というよりは、「釜ヶ崎の町を見物する旅行」という考えの方がより強く頭の中にあっただようだ。これは、今から考えてみると非常に恥ずかしいことだ。

しかし、実際に釜ヶ崎へ着くとみんなの表情が変わった。釜ヶ崎という町に圧倒されたのだろう。広島では見ることのないたくさんホームレスの人々、鼻につきさすような異臭、釜ヶ崎の独特な雰囲気、これはどれも広島では味わえないものだ。旅路の里へ行くまでの間、僕は釜ヶ崎の人に対していくらかの恐怖心があり、話しかけられたくないと思った。やはり、僕の中には釜ヶ崎の人への偏見があったのだということ、このとき改めて実感した。

旅路の里へ着くと、旅路の里の高崎さんが釜ヶ崎の町を案内してくださった。その最中に釜のおっちゃんが僕たちのグループに話しかけてきた。そのおっちゃんは冗談を言ってくれて、僕たちを笑わせてくれた。非常に明るい人だという印象を持った。もちろんそのとき、おっちゃんと話していたのは高崎さんだった。偏見なくおっちゃんたちに接している高崎さんがすごい人と思った。

そして、釜ヶ崎に二日、三日といると、おっちゃんたちは僕にも話をかけてくれた。あるおっちゃんは「もう、死

にそうやわ。」と僕に言った。しかし、その後、「冗談、死ぬわけではないやろ。」と言い、それから人生についても語ってくれた。「若いときは一番ええときじゃ。若いときは何でもできる。今のワシらの生活を変えてくれるのは若い

のしかおらん。そやから頑張れよ。」僕はどういう返事をしているのかも分からなくて、あまり話すことができなかったが、おっちゃんたちの温かみを感じた。色々な人の話を聞いていると、釜ヶ崎では年に80人の人が亡くなっているとか、若い人のホームレスが増えているなど、色々マイナスのイメージが多いが実際そうでもない。何と言ってもみんな明るい。生きるのが精一杯で厳しい状況にいるにもかかわらず、僕たちに話をかけてくれ、冗談を言ってくれる。この精神力の強さはどこから来ているのだろうかと感心させられるばかりだ。また、釜のおっちゃんたちは心が温かい。話していて、その温かみがひしひしと伝わってきた。

炊き出し、夜回り、釜のおっちゃんたちとのふれあいなどを通して僕は大きく変わったと思う。以前、僕は、上手く行かないことが続いてくると、人生というものが嫌になってきていた。生きていて何の意味があるのか。

生きていても何の役にも立たないのではないか。

釜ヶ崎へ行く前はそう思うことがあった。そんな時、釜ヶ崎へ行く前の二学期の終わりごろ、ある友達が僕に話しかけてくれた。「生きていだけで幸せなんだよ。食べられること、寝られること、これらすべてのことが幸せなんだよ。」この友達は夏休みにフィリピンに行ったからこのような考えをもっていたのだろう。この言葉を聞いた時、「そんなことは綺麗事に過ぎないよ。日本では生きること、食べることは当たり前なんだよ。」そのように考えていた僕も釜ヶ崎へ行って変わった。日本でも「生きる」ということは当たり前ではない。「生きる」ということは一番幸せなのかもしれない。そう思うようになった。僕は釜ヶ崎の人から「生きる勇氣」をもらったような気がする。僕は炊き出しなど釜のおっちゃんたちの生活の手助けをしに釜ヶ崎へ行ったはずなのに、逆に釜のおっちゃんたちに勉強させてもらった。釜ヶ崎練成会は非常に良い経験となった。

最後に、僕は釜ヶ崎の人の生活を改善するのに必要なのは、政府から画期的な法案などが出されることではなく、より多くの人々が釜ヶ崎に関心を持ち、ボランティア

アをすることだと思ふ。(2005年12月)

### 山東 典晃(高1)

僕自身最初は釜ヶ崎研修にあまり積極的に行きたいとは思いませんでした。今現在考えてみると本当に馬鹿馬鹿しいことで悩んでいたと思いますが、研修に行く前の僕は本気で釜ヶ崎に行くべきかと悩んでいました。僕が釜ヶ崎に行くのを渋ったのは「釜ヶ崎へボランティアに行くのは自分自身がその日雇労働者の人たちに『慈善事業』をやっているような気になって自己満足に終わるのではないか」と思っていたからです。自分が、心の中では何かを「やってあげている」という充足感を求めているかもしれない、人に感謝されたい、という非常に利己的な理由で釜ヶ崎に行きたいと思っているのなら釜ヶ崎へ行く権利などないと考えたりしました。

実際そのことを母に相談すると、母は「そんなことを言ったら社会的に弱い立場にいる人たちを救う人たちがいなくなるでしょう。その弱い立場の人たちはあなたたち一人ひとりの小さな助けを必要としているのだから行ってみてきなさい」と言いました。確かに母のいうこと

ん滞在しているというような次元のものではありませんでした。確かに事前学習はしましたが、実際僕は路上で生活している人たちがたくさんいるところだというその程度の浅はかな認識しか持っていませんでした。

釜ヶ崎に到着した僕は何だか全く違う世界にきたようでした。海外にきた時のような疎外感ではなくて、自分たちが別世界から来た異星人のような疎外感をまず感じました。自分たちの常識はここでの非常識、同じ日本なのにここまで違う世界を目の当たりにして、僕たちが宿泊した旅路の里までの道のりの間に幾度となく衝撃を受けました。道に沿って歩いているとありとあらゆるところに高い塀に鉄格子の二重三重に設置された刑務所のような施設がありました。少なくとも僕にはそう見えませんでした。しかし、それらは実際には小学校や中学校、警察署、果てにはマンションなどの普通の建物でした。同じ人間同士なのにそれを自分たちの利益のために排除・排斥しようとしている人間の最も汚い部分を目の当たりにして本当に多大なショックを受けました。

旅路の里に到着して実際に色々な活動をしましたが、その中で最も僕の印象に残ったのは夜回りでした。夜回

はもつともだと思っただけで、僕のもやもやとした不安や自分への猜疑心は晴れませんでした。

結局、色々悩みながら両親の声に押されて釜ヶ崎に行く決心をしました。新幹線を降りて釜ヶ崎へ行く途中に大阪の中心地である梅田で滞在する時間が1時間程度もいらしたので、見学という名目の中で少しぐらい楽しんだって良いだろう、と軽い気持ちが出てきました。高層ビルの立ち並ぶ広い清潔な街並みの下に、たくさんの人々が交差する活気のある巨大な地下街が広がって見えているだけで圧倒されるようでした。しかし、その一方でなぜだかは分かりませんが、何か大阪自体が大きな矛盾を抱えているような気がしました。

釜ヶ崎へと向かう駅への道の途中、梅田の歩道橋で2人のホームレスの男性の人に気付きました。その瞬間、一気に現実を引き戻されたような気がしました。この大都市の中でたくさん歩行者に、まるで道に落ちて石のように気にもとめられず段ボールの中に座っているホームレスの人を見て、大阪の大きな矛盾が露呈したような気がしました。でもそれはまだ梅田の話で、その後を訪れた釜ヶ崎はただ単にホームレスの人たちがたくさ

りでは寝ている人たちが、冗談でなく、生きているかどうか確認してカイロや毛布、お弁当等を配るのですが、その夜回りが最も僕に色々なことを考える契機になりました。たくさんボランティアの人たちが集まってたくさんグループに分かれて、道で段ボールを使って作った家や、毛布一枚、果てにはブルーシート一枚だけで寝ている日雇労働者の人たちを見つけては声をかけていき色々なものを手渡したのですが、その光景を見て、本当にボランティアにきている人たちのことを考えると凄く本当に失礼な物言いだと思えますが、路上で雑魚寝している日雇労働者の人たちを探している姿が人間の自分の利益を求める姿に重なっているように思ってしまった。自分たちが「良い体験」をするために本当にいいならんはずの「社会から排斥された人たち」がいることを期待する、これに自分を含めて人間の考えることの矛盾を感じました。本当に僕は正しいことをしているのだろうか、僕が彼らのために本当にできることは何だろうか、僕には彼らのために何もできないのではないかと、不安に駆られました。

そのようなことを考えていましたが、その不安がある

「おっちゃん」に会うことによつてすつかりと晴れました。そのおっちゃんは警察署の前の仮設テントの強制移動に反対している人たちが集まっているところのとある小屋で寝ていました。そのおっちゃんは僕がおにぎりとかイロを渡すと顔をくしゃくしゃにして喜んでくれて色々な話をしてくれました。もちろん皆で移動しながら夜回りしているのですから話す時間が十分あったとは言えませんが、そのおっちゃんは本当に僕に心を開いて何でも話してくれました。自分が昔やっていた仕事の話、警察官に怒られた話、カラオケに行ったら1時間で1万円もとられた話……。僕はそのおっちゃんがカラオケに行つて1万円も騙し取られたということに本当に強い怒りを覚えました。社会がこのような社会的弱者の人たちから搾取することで自分たちの利益を守ろうとする、そのような卑怯な人間が釜ヶ崎を社会から完全に隔離し搾取する構図が続いているのだと思います。

おっちゃんに「本当にご免なさい、僕はこんなことしかできませんけど、どうかおっちゃんも頑張ってください」と僕が言うとおっちゃんは「俺もお前みたいな若者と話せて幸せだった。本当にありがとう。お前も頑張れ

## 淳心学院中学校・高等学校

藤田 泰佑（高一）

今回、釜ヶ崎という日雇い労働者の方が多数いらっしゃる街で、ボランティアという形で色々なことを身を持って体験することができた。これは自分にとつてとても貴重な体験になったし、財産だと思う。言うまでもなくホームレスの方に対する認識と理解はガラッと変わった。その一つに、自分はホームレスの方々とは働きたくないから、路上や公園で生活しているのだらうと思ひ込んでいた。しかし、そうではなかった。三角公園で炊き出しを手伝っていたときに、あるホームレスの方と話したことがよく記憶に残っている。「働きたくて、日雇いの仕事があるここ（釜ヶ崎）に来た。多分ここにいるほとんどがそうだと思う。でももうこの歳ではそう簡単には雇ってもらえないし、雇ってくれたとしても最後まで働く自信がない。」と……このとき僕は、自分の誤解に気づかされたと共に、話せば話すほど、今まで見えていなかった部分が見えてきたように思った。それは今回の体験学習なくしては決して気づくことのできない、しかし一人の人間

よ」と言ってくれました。本当に僕はこの時このおっちゃんに救われたなと感じました。世の中にはこんな僕のような小さな、本当に何の役にも立たないかもしれない小さな手一つ一つがおっちゃんたちには本当に必要だと分かりました。ボランティアなんて一人ひとりの力じゃほとんど意味がない、僕が行つたつて無意味だという人が最近増えてきているけど、世の中にはその僕たちの一つ一つの小さな手を必要としている人がたくさんいるのだというところが今回の研修で分かりました。僕のように屁理屈ばかり並べて行動に移さないとというのが、知らないよりも罪が重いのではないかと考えました。

釜ヶ崎の日雇い労働者の人たちは無学だから仕事にも就けないと言っていた人がいたけれど、むしろ無学なのは理屈を勉強して全て分かったような気になっている僕たちなのだということが分かりました。行動を起こさない限り失うことはありません。でも行動を起こしたときに得られることを失うなんて非常にもつたないことだと感じました。（2005年12月）

として認識が必要なことだと思う。

また夜回りのときに日本橋の西側に行き、今まで思いもしなかったたくさんの発見から、大阪府のホームレスの方々に対する扱いにおける対策と問題点について感じることが多くあった。日雇いの労働者が多数在住されていて比較的認知されている釜ヶ崎から都会といわれる場所まで各地に散在されているホームレスの方々に対する扱いについて僕が感じたことを書きたいと思う。

連日、ホームレスの方の「家」が強制撤去されるといったニュースを目にするが、ここで前提として上げておきたいのは撤去される場所であるということ。本来、公共の場所であつて決して住むことが許可されている場所ではない。もちろん住んでいる人たちも十分わかっていると思う。しかし、それを府や市の都合で追い出すだけ追い出し、「あとと野となれ山となれ」の状態では政府も単なる事なかれ主義者たちの集団にすぎないのではないか。中でもその具体例としては、夜、ダンボールを敷けないように自動的に水をまく装置だとか、座ることが出来ないように石を置くだとか目に余る例もたくさんあった。ホームレスの方たちを生み出した社会の一員とし



でもう少し向き合って考えようとする姿勢が必要なのではないだろうか。

実際に接してみて、ホームレスの方も普通の人だと思っただし、非常に前向きであった。この体験学習は僕にとって始まりのためのキッカケを作ってくれたのだと思っている。これからは自分に何が出来るかを目をそむけずに考えて行きたいと思う。(2006年1月)

### 鶴田 拓志(高2)

釜ヶ崎での体験は、自分の中の意識や考え方を変えさせるものがありました。初めは誘われたから行ってみようぐらいの軽い感じで行くことに決め、ボランティアをするのも先生や友達となら楽しいだろう?ぐらいの思いでした。

事前の話では公然と賭博を開いていてヤクザもいて危ないと聞かされて、正直少し怖いと思っていました。けれど土曜の炊き出しの手伝いの時、周りに毎回炊き出しをしていてくれる人達がいて、何を話したらいいのか困っていたけれど、あちらから何処から来たんや?と明るく聞いてきてくれたし、飴をくれたりして、こっちがそんなに考えることなく話ができるんだと安心しました。

## セントヨゼフ女子学園高等学校中学校

### 常葉 結比(高3)

釜ヶ崎の最寄駅、JRの新今宮駅で降りてすぐに私の目に飛び込んできたものは、大きなジェットコースターがシンボルのテーマパークでした。えっ?ここが?という驚きだけが私の中でぐるぐる回っていました。事前の学習会で話には聞いていましたが、左右に分かれた、青いビニールシートが並ぶ街と、一般人がそれに目がいかないよう気を引くためにと建てられた派手なテーマパークのある街があれほどまではっきり分かれているとは思っていませんでした。そこには、2つの街がまるでお互いが目をつぶりあい、見えないようにして、そして全く対照的に存在しているようにみえました。

シスター山田を先頭にして釜ヶ崎の街へと入っていききました。まず目についたものは、道の至る所に広がる青いビニールシートやおじさんたちとその飼い犬たちでした。うわあ。こんな風景、テレビの中でしか見たことがない。"シヨックを受けるというよりは、まるでテレビのドキュメンタリー番組の中に入っていくような不思議

夜回りをしているときにもすごく感じたことですが、ダンボール生活をしている人達の話は何十人も聞いて、現状は先生方に聞いた以上に苦しいということはやはり気付かされましたが、その人達は僕らの夜回りに優しく応えてくれ、寝ていたところを起こしてしまっただけにもかかわらず、ごくろうさまですと言ってくれました。シスターマリアも彼らの中には自分がとても苦しい現状なのに、周りのもつと苦しい人が満足できるのなら自分に配られた食糧も譲る人もいるとおっしゃいました。道を歩いていても優しく話しかけてくれるし、彼らから僕は本当にぬくもりというものを感しました。

彼らは仕事をしたくないわけじゃなく仕事が見つからずしようがなくそこにいるのに、何も考えず彼らを撤去しようとしている。撤去した後のことは何も考えずにです。それでも彼らはあきらめずたくましく生きようとしていると聞き、僕の中で色々と考えさせるものがありました。僕一人で何ができるといってもないですが、現状を知ることがまず大切だと思うので、これからこういうボランティアに進んで参加していこうと思えました。(2006年1月)

な気持ちで旅路の里までの道を進んでいきました。

私が釜ヶ崎に到着した1月5日には、私たちがお世話になった宿"旅路の里"でもう何年もいらつしやる高崎さんにお話をうかがいました。「釜ヶ崎に働かないで遊んで暮らしていてホームレスになった人たちが集うようになった街」という今までの私の間違った考え方に気づかせてもらいました。過去には、社会に貢献して一生懸命働いていましたが、年をとってから急に職を失った人、家族のために出稼ぎに来ていたけれど、思うように収入も得られずにそのまま居残ることになってしまった人…。そんな、一概には語れない様々な理由で、頑張ってもなかなか悪状況から抜け出せないおじさんたちがここに多く集まっていることを知りました。

道端で寝ているおじさんたちに毛布やカイロを配って回る"夜回り"で出会った一人のおじさんのことが、とても印象強く残っています。服と草履以外には何も身に着けずに、こんなに寒い1月の初めには考えられないような身なりをして道の脇に座っていました。私が足をさすってもなかなか温まらず、とても人間の足に触れているとは思えない感覚でした。結局、足の甲と裏に1枚ず

つ、計4枚のカイロを貼り、体を毛布で包み、その場を後にしました。おじさんの言葉をはっきりとは聞き取ることが出来ませんでした。おじさんが、「ありがとう」と言って何度も頭を下げてくれているように見えました。私がカイロを配って歩くときに、同じように支援する一人のおばさんに教えていただいたことがありました。それは、「カイロいりますか？」ではなく、「カイロをどうぞ」といって手渡すことでした。申し訳なき、自分に対して情けなさを強く感じているおじさんたちの気持ちを察することの大切さを、このとき改めて感じました。

“炊き出し”では、手がふやけるほど、今までには握ったこともない多くのおにぎりを握りました。私は、昼の散歩や夜回りで出会ったおじさんたちのことを思いながら一つ一つ握りました。全ての準備が整い、いよいよ配食かと思っていたら、おじさんたちに食べてもらう前に、私たちが初めに食べることでした。とても後ろめたい気持ちでいっぱい、私はおじさんたちからあまり見えない奥の方で食べました。支援している側の私たちが、わざわざ見せ付けるようにして食べなければならぬという根拠が分からなかったからです。けれど、その理由

けれど、私がこれから先生活していく上で、また将来、何らかの形で私の考え方に、少なからず良い意味で影響し、関係してくると思います。(2007年1月)

## 「人間の美しさ」

セントヨゼフ女子学園教諭 山田 郁子

今年で何度目の釜ヶ崎体験学習に行かせていただいたのか、忘れてしまうくらい参加している。今年、例年と違い6年生3名と大学生5名とが合同して行われた最初の年であった。大学生はこれからの社会人として、この体験をどのように活かせるのだろうか？高校生はこれから大学に入り、何をどのように勉強していくのか？に役立ててくれるだろう、と私の希望はふくらんだ。

今年の釜ヶ崎体験の中で、今回ほど路上生活している方々から「心の美しさ」を感じさせていただいたことはない。私たちの社会通念は、人間の価値を「高所得、高学歴、身なりなど」で、はかってしまう。しかし、路上生活を余儀なくされている人にとって、そのようなことは関係がない。もうその人自身で生きている。「生きる」ことそのものが闘いだからである。

を、食べ終わってから、一緒に支援するおじさんから聞かせていただくことになりました。私たちが作ったご飯を、私たちが先に食べる。それによって、おじさんたちは他の人の手で作ってもらったものを安心して口にすることが出来る、ということでした。

“支援を受ける側の立場にたつて支援しなければならぬ”とは、このようなことを意味するのだと思いました。釜ヶ崎での2日間は思った以上に短いものでした。けれど、この2日間でした経験は、濃くて、重みがあつて：たくさんのおじさんたちと、分ち合おうとする気持ち。また、“共に生きる姿勢”が大切であることを学びました。

釜ヶ崎に行く機会がなければ、決して出会うことはなかった、考えなかったであろう多くのことに触れることができました。それは、触れることによって、傷つき、余計に難しくなっていく問題かもしれませぬ。けれど、同じ人間として生きている限り、決して目を逸らしてはならないことだと思えます。今回の体験が、私のこれからは直接つながることになるかどうかは分かりませぬ。

夜回りをすると、眠っている人を起こしてしまうのだからたいへん迷惑な話である。それなのに、「毎晩見回ってくれてありがとう」と感謝の言葉をかけられる。ある方は服のまま、ゴロンと眠っているので、「寒くないですか？毛布がありますから、かけましょうか？」と声をかけたところ、「ありがとう。毛布をください。朝、何時に返したらいいですか？」と返却を前提に毛布を借りようとする人がいた。

また、ある人は裸足でやはり服のまま眠っていた。「毛布がありますが、かけましょうか？」と言って「裸足ですが、冷たくないですか？」と足を触ってみた。冷たすぎるくらい、冷たい。私はポケットにあつたカイロを取り出して足に貼ってあげた。高校生の一人ももう片方に同じようにカイロを貼ってあげた。だけど、心苦しかったのは、彼の足がパンパンに腫れ上がっていることだった。私たちにはどうすることもできない。ただ「足、痛くないですか？」と質問したが、「痛くない」と答えられた。毛布を足の方を包み込むようにして、2枚かけてあげた。なんだか、泣きたいような苦しい気持ちにさせられた。その足が仕事のきつさを物語るのか、ここでの生

活を物語るのか。なぜ、この人がここで寝なければいけないのか?と自問自答するばかりだった。1日目の夜、日雇い労働をしている吉岡さんから、「この日本社会で誰かがせんとあかんきたないきつい仕事を釜ヶ崎の人たちがやっているから、この日本社会がある。自分は、人を踏みつけて生きていきたくないから、この仕事を続ける」と語ってくれた。その言葉がよみがえってくる。

この野宿している方が道路で寝ているのも、足が冷たくなっているのも、足が腫れ上がっているのも、私たちの生活のどこかで踏みつけにしてきたからこうなったのではないだろうか…と自分に問うのだった。心が痛む。

ある人は、私が「夜回りです。お体はだいじょうぶですか?」と膝について話しかけたところ、「申し訳ないの、膝をつかないでください」と言われた。実は、夜回りのパトロールに出かける前にリーダーの方たちから注意事項がいくつか話される。その項目の中に「野宿している人と顔と顔をつきあわせて話して下さい。決して上から下へ見下ろすことがないように」ということが言われているからである。私もそう思うのでしたことが、その方にとっては、膝をつかれるのは申し訳ないと感じら

## 釜ヶ崎での四校研修

イエズス会司祭 増井 啓

今年の1月5日～7日にイエズス会4校(栄光・六甲・広島・泰星)の生徒と教員とが合同で釜ヶ崎でのボランティア活動を行うことになった。これは栄光学園の望月先生の呼びかけによるものである。4校に共通する教育理念と言えば、「他者のための人であれ」(英語で言えば、Men for others)や奉仕のための「卓越性」(ラテン語で言い表されるMagis)があげられるだろう。このような精神をことあるごとに言い聞かせられてきた青年たちが一堂に会したのである。どのようにそれを体現していくのであろうか、期待しながら見守る日々であった。彼らは、まず様々なバックグラウンドを持ってここへやって来たが、これまでの自分と真摯に向き合う姿がミサの共同祈願や分かち合いでみられた。それは、ここ釜ヶ崎での人々の「生きる」姿に触れたおかげであろう。自分「どのように生きてきたか。今どのように生きていくか。そしてこれからどのように生きるか」を問いかけられたようである。「他者のため」という精神もここでは、

れたのである。

どの方も心が美しい。何も持っていない。夜空の下で服のまま眠らなければならぬ人なのに、私のことを気遣ってくれる。借りた毛布は返さなければ…と考える。私たちの生活は、自分のことではいっばいで、他人に心をつけるゆとりもないことが多い。しかし、野宿している人は、心が美しいうえに、他人への配慮もできる。これほど、人間の尊さや美しさを感じさせられたことはない。

今年の釜ヶ崎体験は、このような方々の美しい心が私に反響し、私の心の中にも、「優しさや温かさ」というものを教えてくれた。釜ヶ崎の人たちありがとうございました。

いっしょに出かけたセントヨゼフの卒業生と勇気ある6年生たち、あのハードなスケジュールをよくこなしました。また、よく考え、話し合ったよね。みんなにありがとう。

どのように捉え直されたであろうか。いくらこちらが与えようとしても、相手がそれを受け入れることが無いならば、「他者のため」は一方通行になってしまう。でも、ここでは、少なくともボランティアをするの青年たちは多くの手ごたえを感じて帰っていった。自分たちの善意が素直に通じること、若者に対する暖かい言葉(ありがとう、ごちそうさま)を受けて、与えているつもりで与えられることの多かった日々を感じたことであろう。この釜ヶ崎の社会的な背景(労働者たちの厳しい現実)に触れ、自分たちにもある現実の厳しさに向き合う勇気を得た者も多くいる。一人の青年の帰る前に語った言葉が印象的である。「僕はここで多くのことを学びました。本当に感謝しています」。若者よ、ここで体験し、よく自分の生活を振り返り、それを今後にかかして、またここに来て、様々な出会いを通して深めていって欲しい。特に、人間性を尊重したり、人を大切にすることを学び取って欲しいと思う。

# 「旅路の里だより」から

## 釜ヶ崎で変えられたこと

聖母被昇天修道会 マリア・コラレス

「マリアはなぜ日本に来たのですか？」この質問を今まで何回となくされたことがあります。私が日本に来た頃、四十数年前にはこの質問にすぐに答えることができませんでした。私はキリストを知って幸せだから、キリストを知らない人に伝えたいと思って来たのです。修道院に入ったことも、日本に宣教に来たことも、その時教会から

教えられたことを信じていたからです。キリストを信じて洗礼を受けた人は本当の神を信じていて、福音は特にキリスト者のものだと思っていました。そしてその福音を人々に知らせることは、信仰の恵みを頂いたことに對する感謝を現すことなのだ。福音は私たち信者のものであって、福音宣教を通してキリストを知らない人々に伝えることは、私たちに与えられている務めだと思つて

いました。勿論、私は信じているから他の人より優れていると思つていたわけではありませんが、どこかで他の人が持たないものを私は持つていると自惚れた態度があったと思います。だから日本に来て、いろいろな方法でキリストを知らせるために働きました。

二十数年前、釜ヶ崎に来た時から私のこの考えがひっくり返されました。毎水曜日、日本橋の夜まわりに行きます。ある夜、いつも同じ場所にリヤカーをとめている顔見知りの人が寝ていたので、起こさないようにおにぎりを置きました。次の水曜日に「この間、眠っていたから黙つておにぎりを置いたのよ。」と言つて「いや、おにぎりはなかった。」と言つたので「誰かが取つたのでしょうか。今度はリヤカーの隠れたところに置いておくね。」と私が

言つと、彼が私をじつと見て「何で？そんなことせんでええよ。きつと通つた人がお腹が空いておにぎりを取つて食べたんだ。それでいいじゃないか？」このおじさんは、自分がもらったおにぎりを食べられた悔しさより、自分と同じくお腹が空いて苦しんでいる人に食べてもらったことを喜んでいました。眩いほどの福音が目の前で輝きました。苦しんでいる人が他の人の苦しみに本当に共感できるのです。

もう一人の人が私に貴重なことを教えてくれました。彼は労働組合の人でした。労働者たちは仕事を求めて行政に対し度々要請に行きます。ある時、デモをして歩いて行くと機動隊がわざともめ事を起こし、先頭に立つていたその組合の労働者が「公務執行妨害」で逮捕され数ヶ月拘置所に入れられて裁判が行われました。だいたいいつも、数ヶ月後に執行猶予のついた有罪判決が出ます。拘置所を出たこの労働者はこう言いました。「マリアさん、俺はな。今回で8回ばくられた。でも、俺は悪いことをしたからばくられたんじゃない。野宿者の人権が守られていないから、守られるように俺は声をあげているだけだ。」社会の価値観では懲罰が8回と書かれた履歴書はど

のように見られるでしょう。しかし、最後の審判のキリストの声が聞こえて来ます。「私が野宿している時に、1回、2回、8回も逮捕されてもめげずに声をあげてくれた。さあ、天国に入りなさい。」

洗礼を受けたからとか、誓願を立てたからとか、それだけでキリストの弟子になつたのではなく、キリストのように生きたかどうかということによつてキリスト者となるのです。

私は釜ヶ崎でこのような体験をたくさんして来ました。ここに住んでいる労働者たちはキリストのことを聞いたことがないかも知れませんが、実際には福音の生き方をしていることが多いのです。福音宣教をするために来たと思つた私は大きく転換させられました。日本に来た時のように同じキリストにひかれていたのですが、私は彼らから学んでキリストに従つて行きたいと思つています。福音は説明するものではなく、それを生きるためのものです。

今、「なぜ日本にいるのか？」と質問されるなら私は「ここはキリストの生き方を一番見せてくれる所だから。キリストの本当の姿にふれさせてくれる所だから。」と答えるでしょう。(旅路の里だより2005年夏号より)

## 私の釜ヶ崎、自分の歩みを振り返って

聖母女学院中学高等学校教諭 笹田 みずす

「こんにちは〜」どや街のビルの谷間にある旅路の里のドアを開ける。「は〜い？」語尾を少し上げた薄田神父さんの声が奥から返ってくる。どしどしと、廊下の羽目板を鳴らして神父さんが玄関口に姿を現す。来訪者を確かめるために、眼鏡を下にずらしてのぞいた丸い眼が私の目と合うと、なんだ君かといった風で、「まあ、はいんなさい。」とおっしゃる。

15年前、私が釜ヶ崎にスケッチに通い始めた頃、釜ヶ崎に着いた時と帰る時は決まって旅路の里に立ち寄っていました。その日スケッチする場所が、どこであっても、始まりと終わりは大抵いつも旅路の里でした。ちよつと気後れしている気持ちを後押ししてもらったり、出来たスケッチを見ながら、その日出会った人のご報告をしたり、行き帰りの短い時間ですが、旅路の里の三帖ほどのお台所で薄田神父さんによくお話を聞いて頂いたものでした。

私は大阪の聖母女学院中学高等学校で、中高生の美術

を担当しています。15年前の夏に「正義と平和協議会」の研修で初めて釜ヶ崎の存在を知り、衝撃を受けました。釜ヶ崎の人々を描きたいという思いにかられ、惹きつけられるように、スケッチに通い始めました。自宅研修日に二人の子どもが小学校から帰ってくるまでの半日ほどの僅かな時間をやり繰りしての釜ヶ崎通いでした。描いても、描いても描きつくせないくらい、描きたくなる人にたくさん出会いました。今でも、あの頃釜ヶ崎で出会った多くの方々のことを思い出すと、胸がいつぱいになり、涙があふれそうになります。

三角公園の南西の角には、頬に傷跡のあるO（オー）ちゃんと呼ばれる人がテントを張って住んでいました。体が不自由なのに、人の世話にはならないと頑張っているOちゃんのもとへは、差し入れを持って来る人や、愚痴を聞いてもらう人や、いつもたくさんの方が出入りしていました。私に、危ないからここで描けと、スケッチの場所を提供してくれていました。ところがある時、久

しぶりに訪ねると、Oちゃんのテントは跡形も無くなり、その一角には鋭い棘を持ったヒイラギ南天がびっしり植え込まれているという、まるで悪夢のような光景を目にしました。おろおろしてあちこち尋ねても、結局Oちゃんの方行方は分かりませんでした。

三角公園の南側の道路沿いに住んでいた元鉄筋工の人は、あるお天気の良い日、私のために、集めた古着の中から良さそうな数枚のGパンを選んで並べて置いてくれました。嬉しそうな顔をして待っていてくれたあの日の情景を今でも鮮明に思い出します。北九州に住むという奥さんと娘さんに何とか連絡は取れたものの、家族のもとに帰りたいというおじさんの願いは、叶えられませんでした。

描かせてもらっているうちに小指が無いことに気づき、はつとしてその人の顔を見ると、『わしは組を抜けてきたんや』と涙ながらにそのいきさつを語ってくれた人もありました。

また、血色の良い、銀髪を短く刈り込んだ小柄な老人は『おおきに、おおきに』と出来上がった自画像をとて喜んでくれました。そして『姉ちゃん、しっかり勉強

しいや。精進してがんばりや』とぼろぼろと涙を流しながら私の手を両手で握って激励してくれました。描いている間に周りには人垣が出来始めて、その中から声がして、その人は立派な鳶職の親方だと教えてくれました。

釜ヶ崎の人々を描くことについて、悩んだ時期もあります。でも、有難いことに、描かせて頂いたら喜んで下さる方が多いのを良いことに、たくさんの方を描かせて頂きました。私の中に映像の様に焼き付いて離れない尊いひとコマ、ひとコマです。釜ヶ崎で暮らす傷ついた孤独な人々が、逆に私を慰め、養って下さっていたのです。

女性との出会いもありました。ある時、旅路の里を訪ねるとタイ人の若い女性がかくまわれていました。タイ語しか話さない彼女のために、薄田神父さんに頼まれて、本を片手に、タイ語を始めることになりました。ようやく少し通じるようになった頃、彼女は母国に強制送還されることになり、電話でお別れの言葉を交わしました。ところがそれから2ヶ月も経たないうちに、私は他の同僚達と一緒に学校からタイに派遣される事になり、タイのスラムの子供達に片言のタイ語で仕事を教えることになりました。この時始まった交流は、私達の学校で今で

も大切に続けられています。神様の計らいの、なんと不思議な事でしょう。

旅路の里には、いろいろな若い人たちも出入りしていました。その中に薄田神父さんが『マーズ』と呼んでかわいがっている少女がいましたが、そのマーズちゃんは、今、釜ヶ崎の高齢者支援施設「ふるさとの家」の所長さんとして働いておられます。

また、その頃、旅路の里には、一人の女性が働いていました。行くとひたすら古着を整理していたりします。ダンボールに入った古着の山に囲まれて黙々と整理しているその女性の姿が頭に焼き付いて離れず、家に帰り着いてから一気に小さな作品にその姿を描きとめたことがあります。今でも旅路の里を切り盛りしている高崎恵子さんです。釜ヶ崎には、多くのキリスト者が住み、働いています。釜ヶ崎には、いくらか働いても完成する事のない仕事に、故こんなにも多くの方が自分を捧げているのか、当時の私には、全く理解し難いことでした。今ならきっと、『釜ヶ崎は、他の何処よりもイエス様にお会いできる街だから』なんて言うかもしれません。

釜ヶ崎に行き始めて3年目の頃『とうとう神様の網に



1970年代の釜ヶ崎銀座通り

かかってしまった』という思いで、私は洗札を受けました。夫は拒絶反応を示しましたが、釜ヶ崎での様々な出会いはその後の私の生き方の視点を大きく変えることになり、受洗を避けて通ることは出来なくなりました。後姿で私の受洗を後押ししてくれた高崎さんとは以来、15年もの長いおつきあいになってしまいました。今でも、高崎さんを始め、たくさんの知人がいると思うと、どんなにご無沙汰した後であっても、安心して釜ヶ崎を訪れることが出来ます。時には、ボランティアの女子高校生達も一緒に連れて。

(旅路の里だより 2006年夏号より)



笹田みすず・画

## クリスマス、心に残る思い出

旅路の里スタッフ 高崎 恵子

私は釜ヶ崎に来て15年になります。その間たくさんの方が天国へ旅立ちました。その中で特に印象に残っている人が数人います。Mさんもその一人です。私はクリスマスが近づくと必ずMさんのことを思い出します。亡くなっても何年も経ちますが、忘れることの出来ない人です。

最初に出会ったのはMさんが野宿をしているときでした。その後、生活保護を受けてアパート生活を始めた。その後、ある日、肝臓がんであること、余命はあと4ヶ月くらいであることを医師から告げられました。出来る限りアパートでの生活を続けたいと言い、病院の帰りには必ず立ち寄ってくれていましたが、段々痛みが出るようになってきました。私は毎日Mさんのために祈っていました。でも、それ以上はMさんのために何も力になれません。そのことが私を苦しめていました。

クリスマスが近づいたある日、マリア像の写真を額に入れてローソクを添え、病院の帰りに立ち寄ったMさんいつも自室の冷蔵庫の上に飾っていたマリア像の額は亡くなったMさんの柩に入れられました。私は宗教を押し付けるような言動は慎みたいと日頃から考えていたので、ほとんど宗教的な話はしなかったのですが、信仰をもっていないなくても宗教的な雰囲気や言葉がその人を支え、生きる力を与えることもあるのだと、Mさんを通してあらためて気づきました。クリスマスが近づくと、慎ましく、しかし精一杯生きたMさんのことが懐かしく思い出されます。私の心の中でMさんは今も生き続け、そんなに遠慮しなくても、神様の話も時々はしてみるといいよと言ってくれているように思います。

(旅路の里だより2005年12月号より)

の前に置きました。「Mさんが苦しんでいるのに私は何もしてあげられない。でも、祈っていることだけは伝えたかったの。マリア様は私が信じているイエス・キリストのお母さん。私はイエスのお母さんにもMさんのことをお願いしているの。Mさんは信じなくてもいいのよ。私が信じて祈っているの。ただ、迷惑でなければこの写真をもらってほしい。」と言いました。Mさんはかぶっていた帽子を脱いで目に涙を溜め「迷惑だなんて；ありがとう。」と深々と頭を下げました。その後も通院の帰りに立ち寄ると「もう、4ヶ月はとくに過ぎたのに生きている。これも祈ってもらっているからかなあ。一人きりなんだから、死ぬのを待つだけだと自殺を考えたこともあったけれど、祈ってくれる人がいるし、心配してくれるボランティアの若い人たちもいる。がんばらなあかんと思う。」と言っていました。

自分のことが出来る間は入院はしないとの希望通り、亡くなる2週間前までアパートでの生活を続けました。



## みことばの葉

闇の中を歩む民は、大なる光を見、  
市の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。イザヤ9. 1

クリスマスを迎え、イエス・キリストの降誕を世界中のいたるところで祝っています。イスラエル民族が約束に約束を重ねて必ず世の救い主が登場すると待望していた長年の歴史を見ると確かに大事な出来事でした。3、000年ほど前にイザヤという預言者が彼らの期待に対してそのように預言し、その希望は時を経ては経つほど大きくなり、永ければ永いほど切迫していったことでもありました。彼らにとってはいつか自分たちが置かれている闇の状態から光へ、死の脅威から命へと信じ続ける信仰体験でした。やがてその日は実現されました。今の私たちも祝っているイエス・キリストの降誕祭のことです。

イスラエルの民族だけではなく、今の私たちの時代でも同じような体験ができるのではないかと思います。闇の中を歩む多くの弱い人々、特に生きるすべを見出せず絶

望している人々、死の陰の世界にいる釜ヶ崎の野宿者のような人々、そして、侵略戦争によって家族・自分の命まで脅かされているイラクの人々のことを想えばすぐ実感できるのではないかと思います。これらの人々にとっては「大なる光」とはなんでしょうか。いつ、どのようにして「希望であり、命である光」が彼らの上に輝いてくれるのでしょうか。

私たちの周りの人々に限って言うと、特に冬の釜ヶ崎の状況から見ると、多くの人が空腹や寒さだけではなく、就職難、未来の見えない毎日、家庭の団欒や希望等がほど遠い約束です。人生に必要な最低限の環境が与えられず、心に少しの満たされる温みもないまま、一日、そして、一日と過ぎて行きます。このような境遇の前にいる私たちに何ができるのでしょうか。キリストがもたらされた「光」はこのような世界には無縁なことなのでしょうか。

先日、「やっと助かったニヤ」と言う記事が目に入って

「今年もボランティアをしたいのですが泊まる場所は空いていますか」などなど。

このような多くの善意の方々からの関心と厚意があった、現場にいる私たちも今年の冬に一枚でも暖かい服を、一日に一杯でも腹を満たせる炊き出しを準備して、一人でも労働者・野宿者からの犠牲を出さないよう頑張りたいと励んでいます。「美しい日本」とは、軍事力や物の豊かさのある国のことではありません。そこに生活している一人ひとりの命が大事にされ、その一人ひとりが必要としている衣・食・職・住が与えられ、人として希望と生きがいが入れられるような国のことではないかと思えます。

こうして釜ヶ崎にいる人々に対して皆さまから分けていただいた「光」が輝き続け、その光からの温みが一人に、そして、もう一人に伝わって行くことがやがて「美しい日本」の形成につながります。「人の命は地球より重い」ということが皆さまのご理解とご協力によって実現され、今年もこの支援事業を誇りと使命をもって頑張りたいと私たち一同心より願っています。

高山 親(旅路の里だより 2006年クリスマス号より)

きました。西宮の夙川公園で一匹の野良猫が人の手によって助けられたという内容でした。公園の松の枝に登ったままだった猫が、市消防局や西宮署によって5日ぶりに救助されたといえます。たくさんの人々が見守る中、レスキュー隊や署員など多くの人があの手この手を使って、失敗に失敗を繰り返しながら、3日間の努力を重ねて成功しました。「おなかが減っているだろうと心配していたのでホッとした」という市民のコメントも添えられていました。(朝日新聞12月8日の夕刊)

釜ヶ崎の労働者・野宿者の方々がこの記事を目にしたかどうか知りませんが、彼らがこの出来事を知ったならばどのような反応をしたか知りたくてたまりません。自分たちを「夙川の猫の運命」に変えさせてほしいと死ぬまで神さまに訴え続けるに違いありません。

猫に対して人々は惜しみなく快く暖かい心をもって手を差し伸べていたのですから、釜ヶ崎の労働者・野宿者にはまだまだ希望があります。旅路の里も多くの善意の皆さまに支え続けられています。この時期になると毎日のようにたくさんの方の支援物資が送られてきます。「寒くなっています。そちらはまだ防寒着は必要でしょうか」



# 釜ヶ崎の歴史と現状

## 釜ヶ崎の歩み

旅路の里運営委員（イエズス会司祭） 梶山 義夫

旅路の里に出入りしていると、日常生活用語として「釜ヶ崎」という言葉を頻繁に使う。釜ヶ崎という地名は、西成郡今宮村の小字名の一つとしてかなり古くからあった。小字名としての釜ヶ崎は一九二二年に廃止されたが、

その後もこの名はこの地域の通称として今日に至るまで存続している。一九六六年五月、大阪市・大阪府・大阪府警察本部が構成する「三者連絡協議会」において、「釜ヶ崎」の統一呼称として「あいりん地区」を使用することが決められた。この協議会において大阪市民生局は、現在の地名で言えば、大阪市西成区花園北一・二丁目（一部）、萩之茶屋一・二丁目・三丁目（一部）、太子一・二丁目、天下茶屋北一丁目、山王一・二丁目・三丁目（一部）の三角地形とその周辺に該当する地域を指している。

。「あいりん地区」という名称はその後、行政やマスコミでは定着しているが、地区の住民や労働者には釜ヶ崎の名称が広く使われている。この釜ヶ崎はどのような歴史をもつのであろうか。

近世の大阪において、非人身分の居住地は天満、道頓堀、天王寺、鳶田にあった。鳶田（飛田）は今宮村町内にあり、そこには刑場と墓地があった。彼らは、犯罪人の追捕・監察、刑場使役、牢番、乞食の取り締まりなどの諸役を負担していた。鳶田の非人たちの追捕などが及ぶ範囲の中に名護町も含まれていた。釜ヶ崎も同じく今宮村領内にあり、紀州街道を挟んで鳶田の西隣に位置していた。そこは稲作に適していない土地で、野菜の供給地であった。今日の釜ヶ崎の形成を考えるうえで重要な

地域は、今宮村の北、日本橋の南にあった名護町（長町）である。江戸時代には木賃宿が設置されていて、各地から飢饉などで大阪に仕事を求めてやって来て、米をついたり、運んだり、油を絞ったりする仕事をする人々が数多く集まっていた。幕末には、名護町に流入する人の数は増加し、同時に野宿者へと転落する窮民も増加していた。

明治初めに非人の身分的な特権と地位が廃止され、居住地は解体された。刑場は廃止され、墓地は移転させられた。一八八九年に町村制が施行されると、鳶田も釜ヶ崎も共に今宮村大字今宮に属したが、同年大阪鉄道（現JR西日本の環状線の一部）の敷設に伴い、それぞれの南側を指すようになり、また今宮村の旧本村と隔絶されるようになった。一八九七年の第一次市域編入に際して大阪鉄道の北部が大阪市となり、その南部が西成郡今宮村となった。

この時期で重要な出来事は一八九六年に釜ヶ崎にマッチ工場電光社が建設され、その職工が数多く住むことになったことである。さらに一九〇〇年代初頭には、まずこの地域では一九〇三年に第五回内国勸業博覧会が現在

の新世界一帯で開催されたり、全国的には日露戦争、そして戦後の不景気の時期となる。この時期に職工の多くは他に流出し、代わって多くの単身日雇い労働者が木賃宿などで生活するようになっていった。この傾向は第一次世界大戦後にさらに強くなる。大戦中の好景気で労働者が多く流入したが、熟練労働者たちは外に移り住んで自立する一方、戦後恐慌さらには金融恐慌、昭和恐慌と続く時期、日雇労働者層や失業や疾病による無職困窮者が数多く生活を営む地域となった。たとえば、一九二〇年代には簡易宿泊所が五〇〇軒、居住者は四〇〇〇人程度で、そのうち単身男性労働者は六割に達し、三〇年代には野宿者も増えてきた。

日中戦争が起こり、国民精神総動員運動が展開するが、釜ヶ崎でも西成労働至誠団が結成されたり、倭約・貯蓄を指す運動が推進された。さらに徴兵の進行で熟練工の不足を背景に日雇労働者を熟練労働者に「更正」させる試みもなされた。四五年の大空襲によって今池や飛田を除き、ほとんどが焼き払われた。

戦後、釜ヶ崎はまず戦災被害者のバラックが乱立し、約四・五千人程度の人々が住んでいたが、五〇年代初め

に簡易宿泊所が再び建てられるようになった。一九六〇年頃までのこの地域は、今宮保護所が伝染病を理由に占領軍から閉鎖されたり、徳風小学校が廃止され多くの児童が不就学のまま放置されたり、行政政策が空白の状態となっていた。しかし朝鮮戦争によって荷役業務が増え、釜ヶ崎も活気を取り戻し始めた。

高度経済成長期の六〇年代、農村や閉山した炭鉱から労働者が流入し、男性単身日雇労働者が一万人を超えた。彼らの多くは二〇・三〇代の若年労働者であり、建設業や運輸業、製造業で働いた。また七〇年に開かれた万国博覧会のための大規模な建設工事は特別な景気をこの地方にもたらし、さらに多くの日雇労働者が全国各地から集まった。七〇年一〇月、現在のあいりん総合センターが設立され、釜ヶ崎の中心的存在となった。

七〇年代、石油危機に対応するため、徹底した合理化と減量経営が行われた。釜ヶ崎の労働者の職種も、建築土木関係の仕事がほとんどとなった。これは、港湾関連の仕事に機械化が導入されたことや、この時期不況を乗り切るためになされた大型公共投資がなされたことと関連している。また不況のあおりを受けた比較的高年齢者が

が流入し、釜ヶ崎の日雇労働者が全体的に高齢化し、併せて病気を患う人々も増えてきた。このような中で、二十五年前に旅路の里が生まれたのである。

現在の釜ヶ崎は、約二万人の単身日雇労働者が集まる労働者コミュニティである。近年、見受けられるのはかつての簡易宿泊所に代わってサポーターティブハウスが建設されていることである。内部では手すりを設置するなどバリアフリーとし、共同リビングを備え、また従業員が居住者それぞれの身体的状況にあわせて、各種相談に応じるなど、居住者の生活を支え応援する工夫が施されている。また野宿状態からでもすぐ入居できるように、入居時の保証金も保証人も不要とされている。目的は、高齢や病気のために働けなくなった野宿者が生活保護を活用して住居を獲得し、二度と野宿に戻らず、福祉の援助を受けて自立した生活とおだやかな老後生活を送れるように支援することだという。しかし現実には、地域内外は数千規模の野宿者が見受けられ、また大阪市内全域の野宿生活者のうち、約半数は釜ヶ崎での日雇生活経験者と見られている。さらに公園などから野宿者たちは行政によって放逐されるようになった。旅路の里の新たな

使命が始まっている。

## 野宿者を取り巻く状況

### 慢性的な失業状態

一九九二年以降、仕事がない日雇労働者は、冬の期間だけにとどまらず年間を通して野宿生活を余儀なくされています。大阪府全域で野宿生活者の数は一万余千名(〇五年)を超えると推定されています。この野宿の問題は、二つの大きな原因—失業と社会保障があります。

日雇労働は慢性的な失業の状態と隣り合わせです。

「あいりん労働福祉センター」での日雇い(現金)求人数は、1日あたりの平均は、好況時の一九八九年では五、二〇七人だったのに対して、二〇〇〇年は二、七〇三人、二〇〇五年は二、四三〇人といった状況が続いています。構造的な不況の影響で、建設業を中心として日雇い(現金)の仕事が減っています。また、雇用者・業者が、寄せ場・釜ヶ崎での求人といった従来からのやり方を変えたこと、また建設工法の簡素化も、求人数減の大きな原因です。

### 福祉の谷間で

労働者の高齢化も問題です。平均年齢は、60歳に近づいていると言われています。不況に加え、高齢化はますます釜ヶ崎労働者から仕事を奪い野宿へと追いやります。

高齢で野宿生活者だからといって生活保護がすぐに適用されるのかといえば、それも問題です。厚生労働省が、生活保護の適用について野宿生活者を区別してはならないという通達を出しています。しかし、区によっては生活保護申請の受け入れを厳しく制限したり、まったく受理しないといったこともあります。

また釜ヶ崎で生活している日雇労働者や野宿生活者に対する「福祉」に関する相談は、市立更正相談所が行うということが続いています。が、たいていの場合、労働者に対しては「法外援護」、つまり生活保護法などの法律によらない例外的な措置(自立支援センター入所など)での対応が多くみられます。

### 働きたいのに

バブル景気崩壊以降、この数年の、釜ヶ崎での求人状

況は、最盛時の3分の1に低迷し続けています。この求人状況と連動して、雇用保険日雇労働被保険者手帳所持者も、今では1万人を切ったと言われています。最近になって、日本経済は、やっと、好況への転換のきざしが見えてきたと言われ、釜ヶ崎での求人状況も若干増えているようですが、55歳以上の高齢日雇労働者の就労機会は、ほとんど閉ざされたままです。この高齢日雇労働者への就労対策として、1994年11月より、大阪府・大阪市によって、高齢者特別清掃事業が実施されています。一日の仕事の紹介人数が、50人で始まったこの事業も、現在は、一日の仕事の紹介人数が191人まで拡大してきています。しかしながら、仕事の紹介人数が増えるにつれて、この事業に登録する労働者も増えてきており、月にして3回程しか仕事に就けない状況が続いています。西成労働福祉センターが、2004年6月7日から18日にかけて、高齢者特別清掃事業に登録している労働者を実施したアンケートによりますと、「月に5〜6回は仕事に行きたい」という要望が多かったようです。このアンケートの結果等を踏まえるならば、高齢者特別清掃事業の継続と拡大は、行政の当然の責務といえます。

止など、生活保護の実質的な切り下げが起こっています。

### 長期化する失業

かつては越冬期だけだった図(1)のような活動も、労働者の高齢化や大失業時代の今は残念ながら日常化してしまいました。

失業は、結果として野宿せざるを得ない労働者を生み出し、そして労働者の生活のあらゆる面を破壊します。残念ながら困窮した時の生活保護(入院、入寮、居宅保護)などの制度利用も簡単にできない仕組みになっています。

### 「仕事をして飯を食べたい」

言うまでもなく釜ヶ崎では、仕事が労働者にとって最も重要なことです。だからこそ、NPO釜ヶ崎支援機構が大阪府・大阪市から委託されている「高齢者特別清掃事業」や「センター周辺環境整備事業」(55歳以上対象)といった活動は、仕事保障の一環です。(一人月2〜3回就労)

もちろん仕事があつて就労ができれば問題はありませ

### 生活保護を取り巻く状況

長引く不況が続く中、大阪市立更正相談所や大阪市内の各区の福祉事務所では、居宅(アパート)での生活保護が、従来に比べると取りやすくなっているといえます。しかしながら、こういった状況と、労働者の生活保護に対する無知等につけ込んで、生活保護費を、不当にピンハネする団体等も、最近、増えてきています。こういった問題に対して行政は、「それは、労働者と団体等の問題である。」といった言い分で、状況の改善のために積極的に動こうとはしていません。居宅(アパート)での生活保護を受けやすくなっている一方では、相変わらず、病院をたらい回しにされて、長期間に渡る入院生活を余儀なくされている労働者も、相変わらず、多く見受けられます。経費の面から考えても、あるいは、自立助長という観点から考えても、長期間に渡って病院をたらい回しにされているという状況は、早急に改善されるべきですが、ピンハネ団体の問題と同様に、行政は黙認を続けています。また、生活保護の制度も改変され、老齢加算金や市営交通の半額乗車券の廃止、水道料金の減免措置廃

ん。しかし釜ヶ崎に仕事に戻ってくる気配はありません。特に高齢、病弱、「障がい」のある労働者就労機会を奪われていきます。

ここ5年ほど前からは、大阪府・大阪市内に何ヶ所か「更正仮設一時避難所」や「自立支援センター」を設置し、巡回相談などで入所を呼びかけて、就労活動を応援する施策をはじめました。2007年には「ホームレスの自立支援等に関する特別措置法」に基づく施策の見直しの時期になり、就労支援の施策の中身が問われることになりました。

### 「野宿をせざるを得ない労働者」と夜まわり

失業は労働者の生命をも脅かします。特に冬期です。その労働者の生命と生活を守る闘いの一つとして夜まわり活動があります。また、釜ヶ崎では木曜夜まわりの会(木曜日) 曙光会(水曜日) 野宿者ネットワーク(土曜日)が年間を通して夜まわりを続けています。

### 野宿から生活保障へ

日常的な生活医療相談や夜まわりでの出会いから、生

活保障の闘いが始まります。生活保護（入院、入寮、居宅保護）申請のため、「大阪市立更正相談所」や「各区保健福祉センター」に付き添います。

生活保護を受けたあとも病院あるいは寮やアパートに労働者を訪問し、生活保護へとつながるための支援をします。

### 野宿生活者への襲撃

主に中・高生から20歳前後の青少年による野宿者襲撃は残念ながら全国で増え続けており、その結果として年に数人の野宿者が殺され続けています。釜ヶ崎周辺では、襲撃は特に日本橋で多く起きており、以前からの襲撃の内容をみると、

- ・ 通行中の段ボールの蹴り、火のついたたばこの投げこみ、空き缶の投げこみ。
- ・ 自転車を用いた木刀・鉄パイプ襲撃、ロケット花火の発射、煙幕球の投げこみ、消火器の噴射、生卵の投げこみなど。
- ・ 車両を用いた者では花火・エアガン（金属製の弾も用いられている）による襲撃が多く、車から降りて

だけでも3日に1度の頻度で起こっており、しかも夏休みなど学校の長期休みに多発しています。

襲撃を行った少年たちの証言をみると、彼らは「ホームレスは臭くて汚く社会の役にたたない存在」、「みなで殴ることで日頃の憂さをはらしたかった」などと語っています。こうした発想は、一般市民の野宿者への偏見・差別を反映しているのでしょう。「襲撃によるストレスの発散」、「他者への攻撃による自己の存在確認」といった内面的問題もちろん重大ですが、何よりも一般に浸透している野宿者への偏見・差別を解消しなければ襲撃を防止することはできません。

襲撃に対する取り組みとしては、生活保護や就労対策によって野宿をしなくてもよい社会状況を作ること、そして、野宿者襲撃は「若者と野宿者の最悪の出会い」とも言えますが、それに対して、野宿問題を広く啓発し、若者や子どもたち、おとなたちが理解と共感をもって野宿者と出会い交流するという、新しい関係づくりが必要とされています。「夜まわり」は野宿者とのそうした出会いの一つなのです。



きた人に木刀で殴られた労働者もいる。

・ 集団で殴る蹴るのあげく内臓破裂で殺す、ガソリン類を野宿者の全身にかけて放火するなど、極めて残酷な事件もたびたび起きる。

という具合です。こうした襲撃は日本橋でんでんタウン

### 強制排除を巡るこの一年の状況

2006年1月30日、大阪市は・大阪城公園で野宿している労働者のテント28張を「公園整備工事」を理由に、行政代執行法に基づき強制的に撤去しました。大阪市はこの強制撤去以降もテント撤去の同意書を半ば強制的に書かせ、公園や路上から野宿者を追い出すことに大阪市は奔走しています。また2006年9月27日には野宿者追い出しの動きに反対してきた5人の仲間が不当にも大阪府警により逮捕されました。その容疑は「威力業務妨害」「暴力行為等処罰に関する法律違反」となっていますが、事実は野宿生活を続けている労働者が生命を守るために建てたテントを、大阪市の役人が一方的に潰そうとしたり、当事者の許可もなくビデオカメラを撮り続けた行為に対し、毅然とした抗議を示しただけなのです。しかもこの抗議活動を行った時期は、逮捕される3ヶ月から5ヶ月前の出来事でした。

5人の仲間が逮捕された翌月の10月13日には、長居公園で野宿生活を続けていた労働者のテントに対し、「2006年12月31日までにテントを撤去するように」というビラが大阪市の南部方面公園事務所によって一斉に配布

されました。この事から明らかになったのは、9月27日の5人の不当逮捕は、強制撤去をより容易に行っていくための事前弾圧であったということです。

### 大阪市の野宿者対策

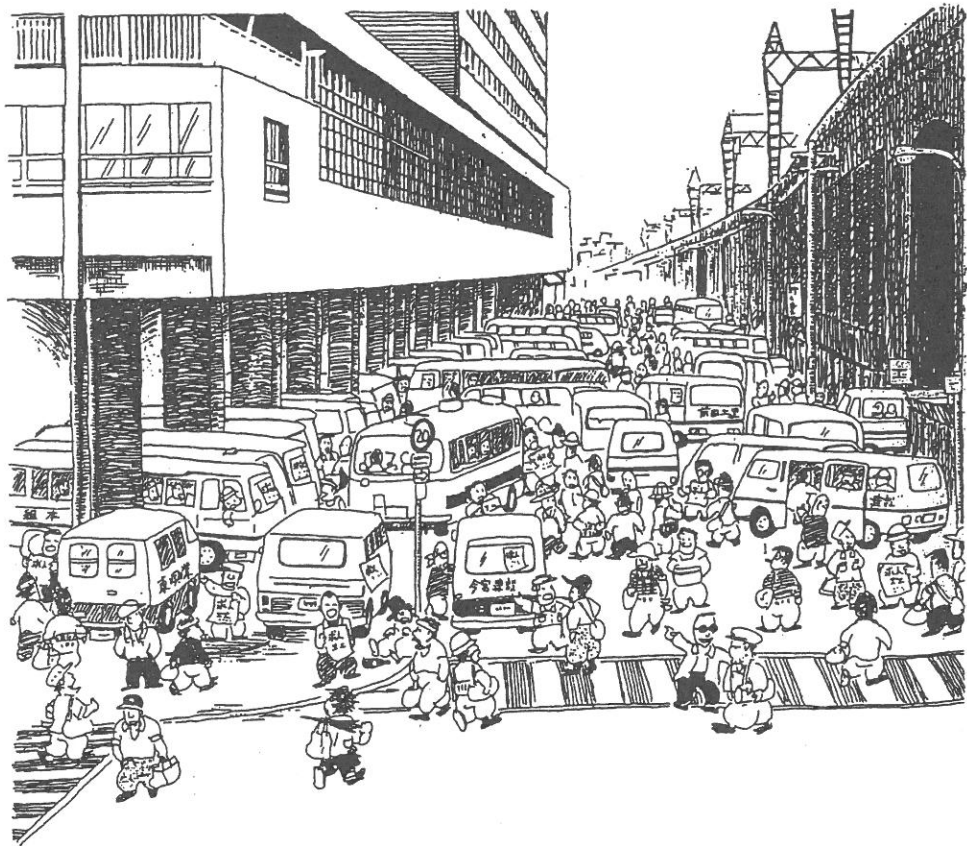
公園や路上からの野宿者追い出しの動きと並行して、現在大阪市が進めている野宿者対策の中核的事業が「自立支援センター」事業です。野宿を余儀なくされている労働者の就労自立を目的とて始まったこの事業も、今年で6年目に入りますが、いまだに具体的な成果をあげていません。2006年2月末現在で、大淀・西成・淀川の3自立支援センター退所者は合計2886人で、内43%にあたる1252人が就労退所とされています。しかし、その実態はほとんどが清掃や警備の仕事で、常雇いとはいつても半年や1年と期限を決められていたり、パートやアルバイト並みの時間給や日給月給での雇用が大部分で、安定した就労となりえずに再野宿を余儀なくされる人も多数にのびります。

このような自立支援センターの現状では、公園や路上からの強制排除を繰り返し行っても野宿問題が根本的に

解決していくことはあり得ません。大阪市のあまりにも不十分な対策は、結果的により過酷な状況へ野宿生活者を追い立てていると言えます。

「急がば回れ」の諺ではありませんが、野宿者問題を根本的に解決していくには、時間を十分にかけ、一人ひとりのケースに見合ったきめ細かな対策が必要です。そのためにはまず当事者の声を聞くことから始めるべきです。来年の8月には「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」が施行されて5年目にあたり、必要な見直しを行うことになっています。大阪市は強制排除という力で、野宿者問題と関わることを止め、日本も批准している国際人権規約にのっとり、十分な話し合い、希望やニーズに添った自立支援策を一から考えるべき時に来ているのではないのでしょうか。

06/07釜ヶ崎キリスト教協友会ガイドブックより



1980年代後半の釜ヶ崎 日雇労働者求人場所

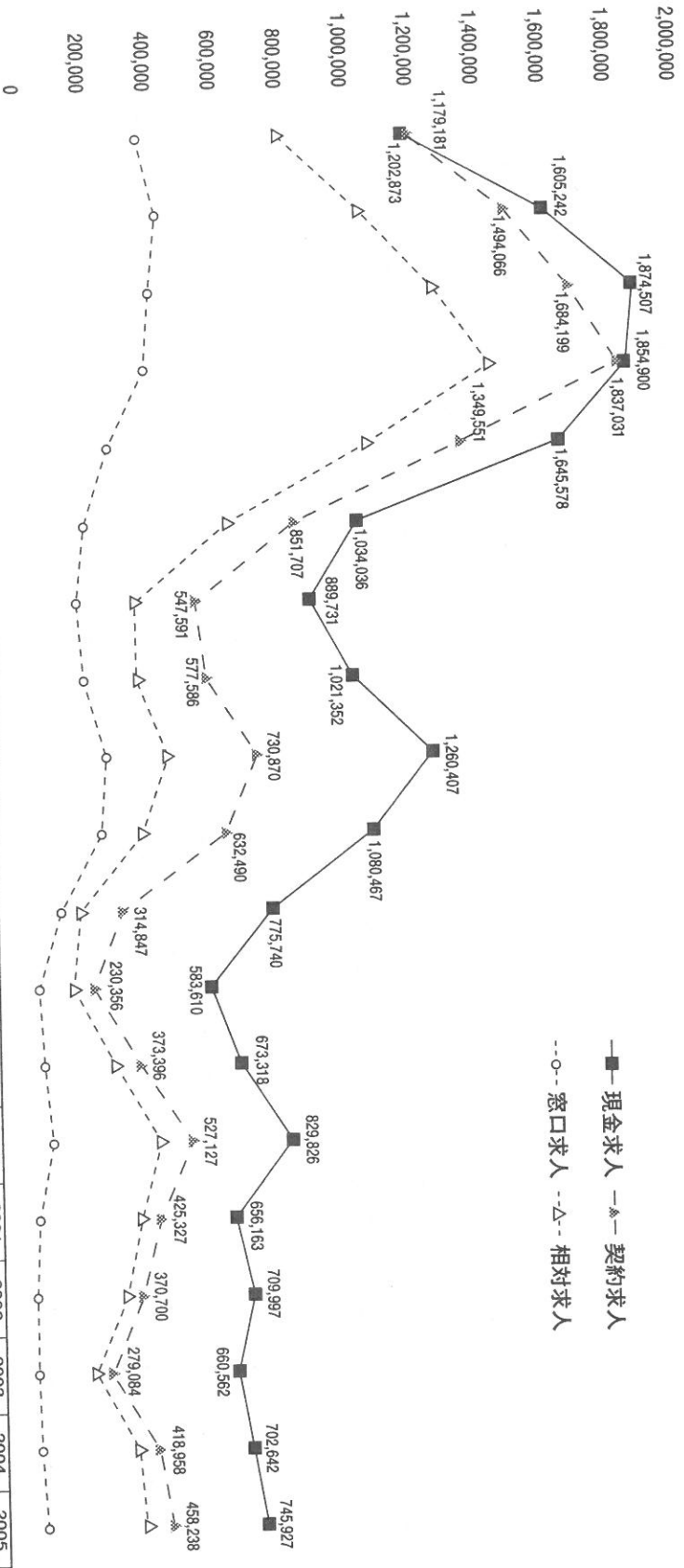
大阪市全体の行路死亡人

区別・年度	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
北区	14	18	14	11	7	12	17	13
都島区	5	5	4	7	2	8	4	4
福島区	5	1	3	0	8	7	2	5
此花区	8	8	8	2	5	9	4	2
中央区	15	13	13	11	12	13	13	10
西区	5	6	3	4	4	2	2	3
港区	6	4	15	5	6	5	9	5
大正区	4	7	3	4	3	2	2	3
天王寺区	11	6	7	8	3	5	1	3
浪速区	11	14	20	11	8	10	5	14
西淀川区	8	2	2	2	4	5	6	5
淀川区	0	4	6	11	6	8	3	7
東淀川区	5	5	3	2	3	3	8	5
東成区	2	2	0	0	1	0	1	1
生野区	2	0	1	0	1	2	0	3
旭区	1	2	1	1	6	1	2	0
城東区	1	7	4	2	3	2	2	0
鶴見区	2	0	1	2	1	1	0	0
阿倍野区	6	2	3	0	4	5	5	2
住之江区	13	13	12	10	11	12	13	5
住吉区	2	3	3	1	1	2	3	0
東住吉区	5	4	2	2	3	3	3	2
平野区	4	1	3	2	2	1	1	3
西成区	34	36	14	7	19	24	25	9
合計	169	163	145	105	123	142	131	105

'06～'07釜ヶ崎キリスト教協友会ガイドブックより

1987年度(昭和62年度)～2005年度(平成17年度)求人状況(年度別比較)

(図1)



'06～'07釜ヶ崎キリスト教協友会ガイドブックより

## 夜まわりをする時 気をつけなアカンこと

○チームワークを整えよう。たくさんでまわる時は、勝手にどこかへ行ってしまわないように、相談が長引く時はリーダーに必ず知らせる。

○ベチャクチャといらんことをしゃべりながら回らない。うるさいだけです。

○寝ている労働者を大勢で取り囲まないようにしよう。襲撃などがあるため警戒しながら寝ています。

○労働者と話すとき、なるべくしゃがむなりして視線を同じ位置にして話そう。上から見下ろすと威圧感を与えます。寝ているのが自分だったらどんな気になるか、想像すれば分かるはず。

○寝入る労働者を無理矢理起こす必要はない。寒さのためいったん起きてしまおうとなかなか寝付けません。ただし、緊急の対応が必要だと思われる場合や、この人はどうかなあと思う人に関しては、リーダーの意見を聞く。

○呼吸数や脈拍数を目安にして、緊急と思われる時は救急車を呼ぼう。本人が同意すれば、救急車に同行する

ことも必要。あるいは救急車の番号、救急隊員の氏名、搬送先などを詳しく聞いておこう。

○必要があれば、協友会の情報ビラがあるので、渡そう。

○襲撃の現場を目撃したり、話を聞いたりしたときは、警察に通報しよう。また労働者から詳しい事情を聞いておこう。

○犬を飼っている人たちもいるので、犬に吠えられたりしたら無理をしない。リーダーの判断と指示に従う。

○夜まわりのあとは、その日見聞きしたことを報告しよう。

'06-'07釜ヶ崎キリスト教協友会ガイドブックより

## 「炊き出し」労働者アンケート設問と集約

第37回越冬闘争の「炊き出し」を担当する『勝ちとる会』は、2007年1月8日体験学習・ボランティアの神奈川県栄光学園・兵庫県六甲学院・広島県広島学院・福岡県泰星学園イエズス会4校の高校生の協力を得て、「炊き出し」労働者アンケートを行いました。当日、昼の配食前11時ごろから約30分間、行列中の労働者201名に声をかけ、内140名が応じてくれました。「炊き出し」終了後、『旅路の里』でアンケートの集約作業を行いました。

その結果は以下のとおりです。最近の釜ヶ崎労働者の状況・特徴を垣間見る結果を示していると思われる。

- 1 失礼ですが、年齢を聞かせてください。
 

30歳代	6名	40歳代	4名	50歳以上	22名
55歳以上	29名	60歳以上	28名	65歳以上	11名
70歳以上	5名	75歳以上	2名	20代	1名
不明	1名	(計109)			
- 2 今回の「越冬闘争の炊き出し」(12月25日から1月10日まで)は何回ぐらい食べましたか。
 

ほとんど毎回食べた	41名	10回以上食べた	11名
5・6回は食べた	28名	2・3回は食べた	34名
今日はじめて並んでいる	11名	その他	6名(131)
- 3 美味しかったものは何ですか(複数回答で結構です)
 

毎回の丼	18名	親子丼・玉子丼・木の葉丼・中華丼	27名
カレー	32名	さぬきうどん・年越しそば・沖繩そば	15名
もち(ぞうに、ぜんざい)	7名(99)		

4 出身地域はどちらですか。

北海道 4名 東北 7名 関東 8名 東海 1名  
北陸信越 8名 関西 35名 大阪 10名 四国 14名  
九州 29名 沖繩 3名 その他(モンゴル1名)(120)

5 昨日はどこに寝ましたか。

シエルター 60名 野宿 31名 ドヤ・簡易ホテル 17名  
アパート・文化 6名 施設(入院施設) 1名  
自分の家 6名 その他 5名(126)

6 釜ヶ崎に来て、どれくらいになりますか。

最近来た 4名 1~3年以内 11名 5年以内 10名  
5年以上 14名 10年以上 35名 20年以上 48名(122)

7 いつまで働きましたか。

昨日まで 22名 年末まで 35名 半年前まで 11名  
1年前まで 10名 2年前まで 4名 3年前まで 7名  
4・5年前まで 16名 10年前まで 9名  
10年以上前まで 2名 その他(2日前まで1名、  
2・3ヶ月前まで1名、なし1名)(119)

8 居宅保護を受けていますか。

いる 18名 いない 118名(126)

9 ありがたいございました。最後に今年の願いや抱負を一つだけ聞かせてください。

仕事がしたい・働きたい 34名 健康でありたい 23名  
炊き出しを毎日やってほしい 7名 福祉の改善を望む 3名  
釜ヶ崎から脱出したい 3名 特にありません 43名  
その他 12名(炊き出しをもっと早く・もっと美味しく、  
お金をためたい・自立したいなど)(125)

## 釜ヶ崎で祈る「主の祈り」

本田 哲郎（フランシスコ会司祭） 労働者のミサより

天におられるわたしたちの父よ。

空のかなたでなく、万物をささえる見えない世界「天」において、  
人の世の低みから働かれるわたしたちの父である神さま。（詩  
篇113、139）

御名が聖とされますように。

世の小さくされた者ともに働くあなたを、  
みなが聖なる方とめめますように。

（出3・14、フィリ2・11）（マタイ25・35-45、28・20）

御国が来ますように。

御国とは、「解放と平和と喜び」の世界です。

わたしたちが、不足を分かち合うだけでなく、

抑圧された仲間の解放をめざして助け合い、

神と人を大切に作る社会をつくっていきましょう。

御心がおこなわれますように。

御心、それは世の小さくされた者が優先されること。

低みから立つ仲間たちが勇気をもって自分を表し、

連帯する仲間とともにあゆみを起こせますように。（マタイ  
18・12-14、10・40-42、25・40）

天におけるように地の上にも。

「死んで天国に行けば…」というがまんと逃げの姿勢をすて、

天国に期待することをこの地上にも実現する努力をつづけさせ

てください。

わたしたちの日々の糧をきょうもお与えください。

ほどこしによってではなく、自分で食べていけるように、

きょうの仕事を得させてください。（マタイ25・35、2テサロ  
ニケ3・7-10）

働けなくなったときには、正当な福祉が適用されますように。

わたしたちの借りをゆるしてください。

わたしたちも自分に借りのある人をゆるしています。

わたしたちは家族や知人そしてあなたに、大きな借りをつくつ  
たかもしれません。

仲間どうし日々ぎりぎりの暮らしの今、貸し借りはあっても、  
返せない相手から

むりに取り返すこともできず、ゆるしてきました。

どうか、わたしたちの借りもゆるしてください。

わたしたちを試みにあわせず、抑圧するものから解放し  
てください。

低みから立つ仲間を「抑圧するもの」、それは、

立場の弱い者を差別する世間のしくみと、世間にあわせて、

自分を卑下してしまう自分自身。「ちからは、弱っているときに  
こそ發揮される」。

この聖書のことばを信じて、わたしたちも抑圧するものと対決し、

みんなが解放されますように。アーメン。



バブル経済の崩壊後 釜ヶ崎は厳しい景気後退に入る



# 釜ヶ崎語録

## ◇ホームレスの意味は

「せまい意味では、路上や河川、公園などで小屋掛けをしたり、テントを張って暮らしている人びとを指します。より広い意味では、社会の中で居場所を失っている状態の人びとを示す言葉です。新聞やテレビの報道では、「野宿生活者」「路上生活者」という言葉がよく使われていますが、ここでは社会との関係を重視してホームレス (Homeless 英語) という用語を使っています。高齢や病気を理由に仕事を失い、さまざまな理由から生活保護をうけられずにいる場合がほとんどです。「釜ヶ崎」など寄せ場の日雇労働者が職を失う古くからあるタイプに加えて、最近ではサラリーマンが突然解雇されてやむなく野宿生活を送るといったケースも増えてきています。ホームレスの多くは、一般のアパート

など畳の上での生活に戻ることを目標としていますが、とりあえず臨時の宿泊所や作業所などのステップを踏んでから自立生活を送る人もいます。

## ◇「釜ヶ崎」とは

大阪市西成区の一部の地域をさす俗称です。西成区の総面積742km<sup>2</sup>に対して、0.62km<sup>2</sup> (8.4%) を占めていて、人口は2万5,000〜3万人と推定されます。

単身の日雇労働者が最も多く、鉄筋コンクリートづくりの簡易宿 (いわゆる「ドヤ」) が多く立ち並んだ、日本有数の日雇労働者の街です。行政の用語では「あいりん地区」「あいりん地域」などと呼ばれていますが、そこに住んでいる人や地域の関係者は、親しみを込めて「釜ヶ崎」と呼んでいます。

## ◇簡易宿

かつて「木賃宿」と呼ばれていた宿は1926年 (大正15) の法律によって「簡易宿」と名称を変更して組合をつくり、それまで宿によってバラバラだった宿泊料金を統一しました。名称は変えたものの、一間に複数の人がいっしょに寝起きする仕組みで、戦後の鉄筋コンクリートづくりの簡易宿には、狭いベッドがいくつも重なったタイプのもが多くありました。

## ◇福祉型マンション

2000年から釜ヶ崎地域内で増え始めたアパート。従来の簡易宿泊所 (ドヤ) を改装し、アパートとして登録。生活保護申請のための相談や日常的な介護なども行われています。敷金・保証金はいらなかったため、路上からの生活保護が以前よりは取得しやすくなってきていますが、居住環境としては課題が残っています。

## ◇シェルター (仮設一時避難所)

「あいりん夜間緊急避難所」のこと。大阪市によって釜ヶ崎地域内に法外援護措置として、2ヶ所設けられて

います。夕方6時から翌朝5時まで一晩のみの入所が可能です。昼間の使用はできないなど、地域住民との関係から、利用については制限もあります。運営についてはNPO釜ヶ崎 (特定非営利活動法人釜ヶ崎支援機構) の略称) が委託をうけています。

## ◇夜回り

夜、野宿労働者のもとを訪れ、医療・生活相談、物資の配布などの活動をすること。釜ヶ崎では、越冬期間中だけでなく、さまざまなグループによる通年の夜回りが行われています。

## ◇炊き出し

四角公園では、毎日、釜ヶ崎地域合同労働組合による炊き出しが行われています。三角公園では、週2回「勝ちとる会」 (釜ヶ崎高齢日雇労働者の仕事と生活を勝ちとる会) の略称) によって行われています。多いときは1500食を超えています。



1978年 マザーテレサの来釜



1984年 協友会の遠足（津和野・山口）



1985年 患者交流会

初めの時代

## 写真で見る旅路の里の諸活動と釜ヶ崎

### ◇ホームレスへの襲撃事件

ホームレスに対する襲撃事件がよく起こっています。「汚い」「うっとましい」「じゃま」という否定的な感情によって、ホームレスを死に追いやってしまうのです。連日のように報道される「殴り死なす」「襲われ死傷」という内容からは、ホームレスの命の危険性が非常に高いことがわかります。

### ◇「釜ヶ崎」暴動

戦後の「釜ヶ崎」でおこった日雇労働者を中心とする騒動は、報道では「暴動」といわれていますが、実際は、社会の理不尽な行為に対する抗議行動です。「第一次釜ヶ崎暴動」は、1961年8月1日から数日間続いたおこなわれましたが、その直接の原因は、交通事故で重傷を負った日雇労働者がまだ生きているにもかかわらず、警察官が「死体」あつかいしてムシロをかぶせたからでした。

### ◇白手帳

雇用保険日雇労働被保険者手帳のこと。2ヶ月で26日

間働き、手帳に印紙を26枚（原則として1日働くと1枚もらえる）貼付すると、翌月から13日を限度に、アブレ（失業）ときに1日7500円支給されます。80年代後半約25000人を数えた受給者は現在約5000人に減少しています。

### ◇行路死

行き倒れのこと。行路病死ともいわれます。大阪での行路死は毎年200〜300名とも推定されます。身元不明の行路死だけでも2004年は131名を数えています。西成区は25名。

釜ヶ崎キリスト教協友会資料  
大阪人権博物館資料



1986年4月 協友会合宿



2代目所長オマリー神父とボランティアの青年たち



3代目所長 英 神父



1985年 患者交流会



1986年 第15回夏祭り



1985年



1986年 現代社会におけるキリスト者使命研修会



たくさんの出会い





# 体験の分かち合い

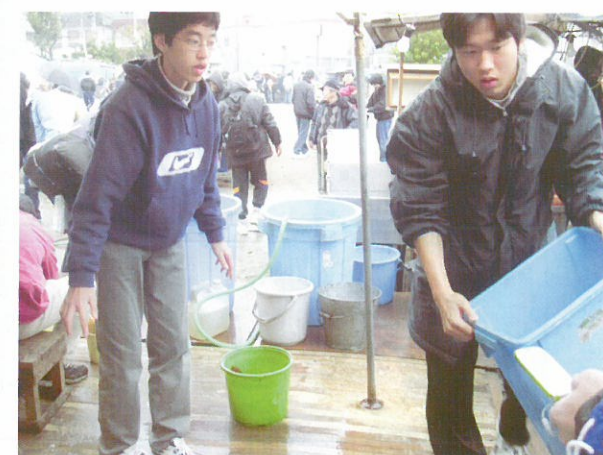


炊き出しアンケート



聞き取りと集計

# ボランティア活動



炊き出しの手伝い





# 三角公園の炊き出し



# 釜ヶ崎の現状



夏まつり (三角公園)



衣類放出 (三角公園)



医療センター前ふとん敷き



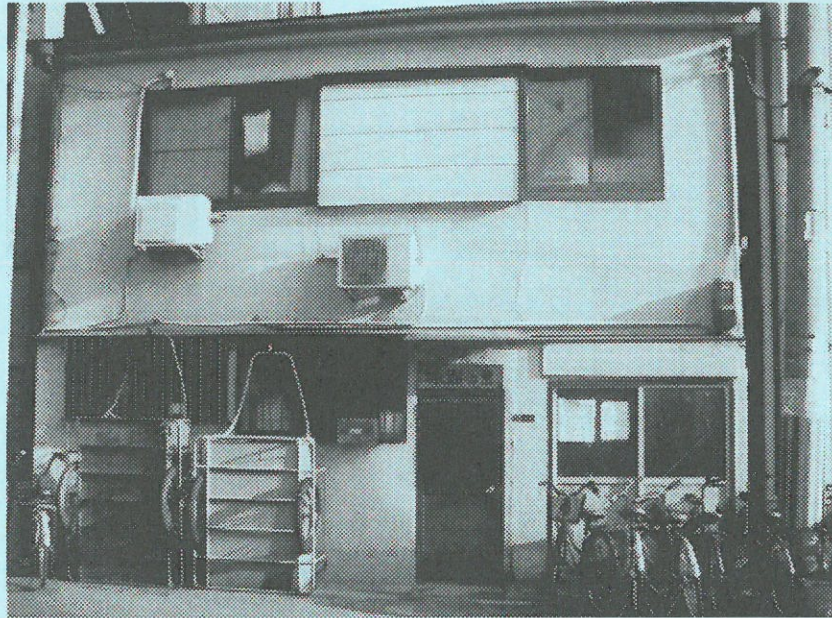
西成労働福祉センター内部

## イエズス会社会使徒職の特徴

イエズス会における「社会使徒職」という言葉で、私たちが理解する使徒職は、

- 貧しい人々への優先的愛に根ざしている（あらゆる使徒職に共通の側面）
- 貧しい人と共にあること、時には、貧しい人々のように生活することによって、私たちのすべての使徒職に共通な、この優先的愛を具現化する
- 貧しい人や疎外されている人の視点から、より公正で人間的な社会を目指して、構造変革の実現を探求する
- 貧しい人々は、決して私たちの仕事の対象ではなく、いつも変革の主体であることを、当然のことと受け入れる。
- 下から上へと形成されていく、よりグローバルな視点からの発言を伴いつつ、ローカルに実践される
- 厳密な社会文化分析を前提とする
- 他のイエズス会員や修道者、信徒の協力を引き出すことを目指す、包括的な感受性を持ったチームによって実践される

イエズス会の社会使徒職「チャレンジと現状」ローマ2003年6月『社会部門のアシスタンス・コーディネーター会議』決議文書より



旅路の里全景

### イエズス会社会司牧センター 旅路の里

〒557-0004  
大阪市西成区萩之茶屋 2 - 8 - 9  
電話 06-6641-7183 FAX 06-6634-2129